



平成30年度 東アジア国際シンポジウム

環濠

集落

その源流をたどって

— 環濠集落にみる東アジア交流 —



ごあいさつ

九州本土と朝鮮半島との間、玄界灘に浮かぶ壱岐島は、「魏志倭人伝」にも描かれているように古代から、朝鮮半島や中国との対外交流において重要な役割を果たしてきました。このような歴史的背景を踏まえ、長崎県埋蔵文化財センターでは、開設以来、東アジア世界との交流の歴史に焦点をあてた研究を進めています。その東アジア考古学研究の一環として、平成27年5月に友好機関協定を締結いたしました韓国・釜山博物館をはじめとする国内外の研究機関の御協力を得ながら、これまで原の辻遺跡で出土した大陸・半島系遺物について検討を行ってきました。

本日のシンポジウムのテーマは「環濠集落 その源流をたどって—環濠集落にみる東アジア交流—」です。弥生時代に出現した環濠集落は、東アジアにその起源をたどることができます。そして、長崎県では原の辻遺跡やカラカミ遺跡といった地域の拠点となる遺跡に環濠がみられます。シンポジウムでは東アジアの環濠集落をご専門とされる龍谷大学の徐光輝教授、韓国・釜山の第一線で調査研究にあたられている釜山博物館の金宥正学芸研究士をお招きして、最新の研究成果を基に、環濠集落を通じた東アジアの交流について明らかにしていきます。どうぞ御期待ください。

結びにあたり、講師をお引き受けいただいた先生方をはじめ、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、今回のシンポジウムを契機に、日本と韓国との文化交流がますます深まりますことを祈念いたしまして、ごあいさつといたします。

平成30年10月20日

長崎県埋蔵文化財センター所長

石橋 明

目次

巻頭カラー.....	01 頁
環濠集落としての原の辻遺跡	
長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久	03 頁
嶺南地域三韓時代環濠の性格検討	
釜山博物館 金 宥正	12 頁
環濠集落に見る東アジア交流	
龍谷大学 徐 光輝	24 頁
環濠集落としてのカラカミ遺跡	
壱岐市教育委員会文化財課 松見 裕二	34 頁
講師プロフィール.....	36 頁

表紙題字の「環濠集落」は徐光輝教授の揮毫によるものです。



吉岐市原の辻遺跡 環濠内の遺物出土状況



吉岐市原の辻遺跡 復元された周溝状遺構



吉崎市カラカミ遺跡 環濠の断面



韓国・釜山広域市 温泉洞遺跡の環濠

環濠集落としての原の辻遺跡

長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久

I. 緒言

原の辻遺跡は大規模環濠集落として著名な遺跡である。環濠の様相については2001年に宮崎貴夫によってその変遷が追究され（宮崎2001）、現在の研究の基礎となっている。2004年度までの調査成果を総括した『原の辻遺跡総集編Ⅰ』では、当時知られた原の辻遺跡全体の環濠の様相についても整理されている（中尾・福田2005）。その後も調査が進展し、環濠の様相も徐々に明らかとなっており、折々の発掘調査報告書で、丘陵東側低地部（川畑2007・2008）、丘陵南部（林2008・川畑2011）、丘陵西側低地部（川畑2011）、丘陵北東低地部（古澤2018）など地区ごとの環濠や溝のつながりについて検討が進展した。また、環濠を中心とする集落の中の人の移動を明らかにした研究（松見2015）もみられた。ここでは、これらの研究成果を参照・総合しながら、『原の辻遺跡総集編Ⅰ』以降の調査成果を盛り込んだ原の辻遺跡全体にわたる環濠の様相を提示し、その変遷を示すとともに環濠の用途・役割などについても触れたいと思う。

II. 原の辻遺跡の環濠の変遷

1. 集落成立期（図1）

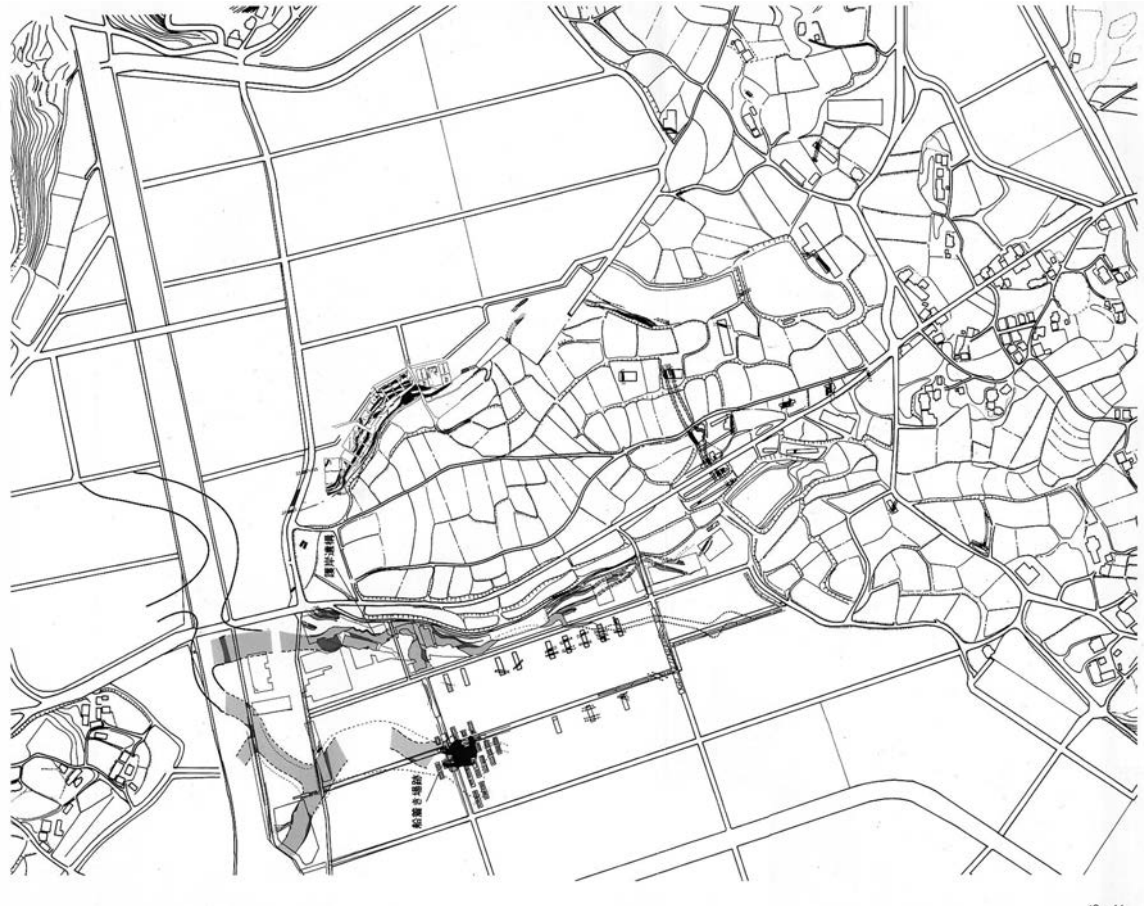
原の辻遺跡で出土する最古の弥生土器は板付Ⅱb式であることから弥生時代前期後葉から集落が形成されるとみられる。この時期の遺構は多くはなく、東側低地で大溝、北西側低地で溝が掘られる。これらの遺構は環濠として集落を廻るものではないようである。

2. 弥生時代中期（図1）

環濠が設置されるのは弥生時代中期である。宮崎が指摘したように北西低地部（不條地区）で須玖Ⅰ式古段階の土器が覆土から出土した土坑を切る形で環濠が造られている事例があり、弥生時代中期前葉頃を上限とする時期に環濠が掘られたことがわかる（宮崎2001）。弥生時代中期には丘陵部を取り囲む複数の環濠がみられる。これまでのところ北西低地部で3条程度、北東低地部3～4条程度、丘陵頂部南側では2条以上の環濠が確認されている。但し、北西低地部の一部は河川の支流が流れており、この部分は環濠がめぐらない。丘陵南部でも数条の濠・溝が確認されている。調査事例が少なく、具体的な延伸状況はよくわからない。環濠の断面は北部では逆台形やU字形が多いが、丘陵南部ではV字形が多いようである。北部の環濠は丘陵の裾野に設置されており、底部に砂が堆積したり、多量の有機物が含まれるという堆積状況からも水流や滞水があったものと推定されるが、反対に丘陵南部の濠・溝では水流・滞水はなかったものとみられる。

北部の環濠と河川で囲まれた範囲の中では竪穴建物跡や掘立柱建物などが発見されており、居住空間であった。この居住空間とは分布を異にして、丘陵南部では墓域が分布する。そのため丘陵南部の濠や溝の中には墓域内を区画する溝も含まれている可能性もある。居住域は環濠内だけでなく、北西低地部の河川で挟まれた空間で多くの土坑等が発見されている。また、丘陵北側の河川より更に北

弥生時代中期



弥生時代前期末

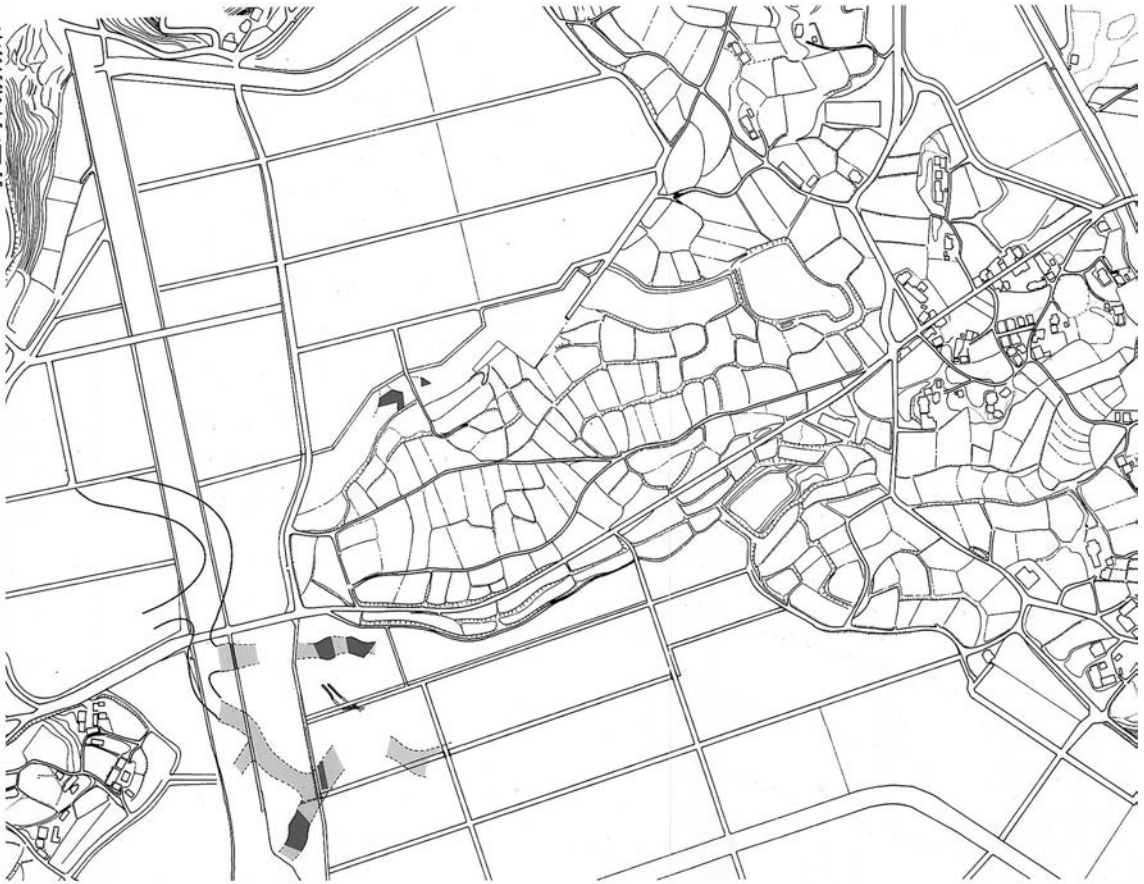


図1 原の辻遺跡における環濠の変遷(1)

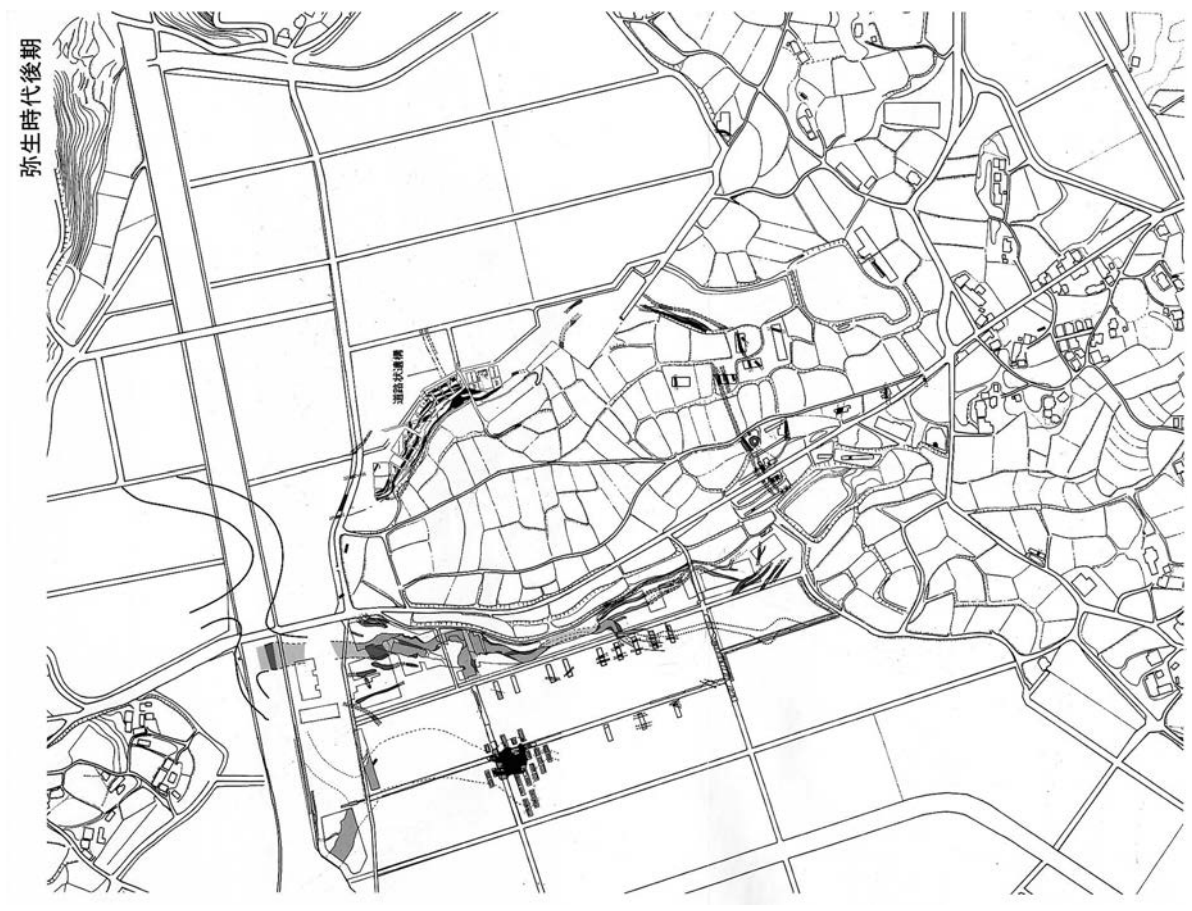
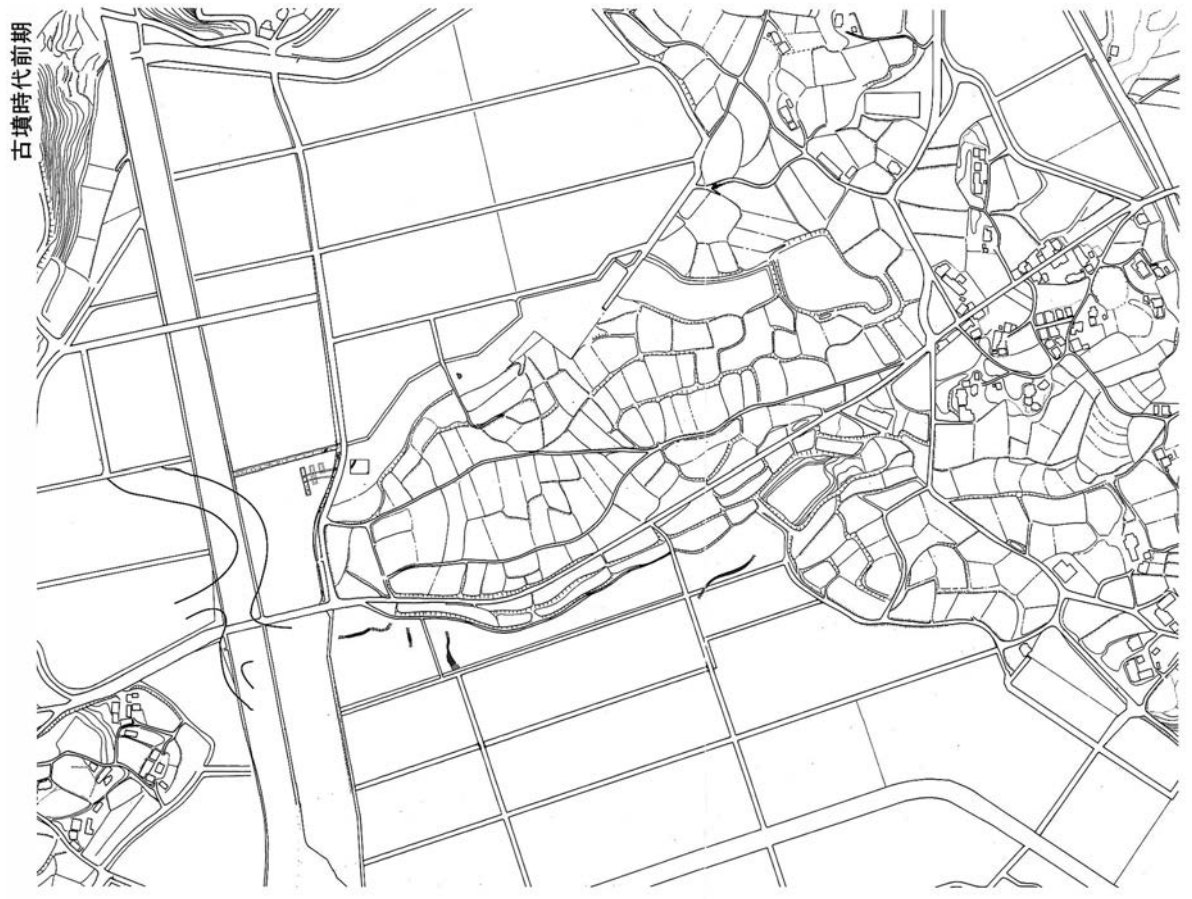


図2 原の辻遺跡における環濠の変遷(2)

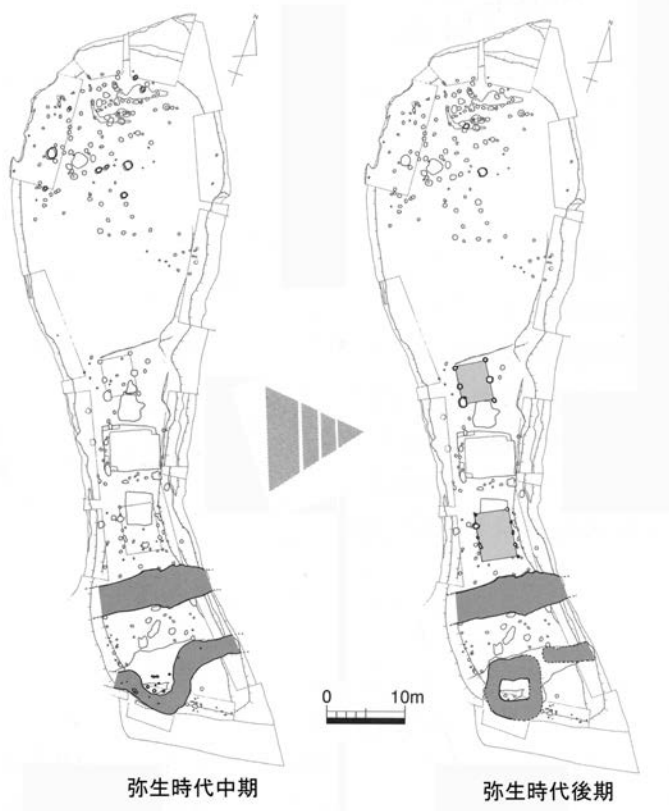


図3 丘陵頂部附近の環濠の変遷

3. 弥生時代後期（図2）

弥生時代中期後葉に埋没した濠の多くは、後期前葉に再度、掘削され濠としての機能が復活する。これと同時に北西低地部で河川支流の西側の微高地にも濠が数条新設される（図4）。また、同じく西側低地部の河川支流の西側でも弥生時代中期末～後期前葉に少なくとも2条の濠が新設される。丘陵南部でも数条の新たな濠が新設されるようである。濠が新設される範囲が丘陵からみて外側に拡張されている状況が指摘できる。反対に北西低地部や河川本流よりも北側の低地は居住域としての機能を失い、環濠内の丘陵に居住域が集約されていく現象が観察される。濠の断面形状は丘陵北部では中期段階と同様の逆台形やU字形もあるが、再掘削された濠ではV字形に変化しているものも認められる。丘陵南部の濠は断面V字形のものが多。西側低地部の一部の環濠では環濠埋土の堆積状況から環濠の内側に土塁があったものと推測されている。武末純一は弥生時代前半期の環濠では環濠の外側に土堤がある例が多い一方、弥生時代後期後半には環濠の内側に土堤を設ける例があり、次の古墳時代に繋がっていると指摘しているが（武末1990）、本例もそのような事例となる可能性が高い。

後期の環濠の中には特異な施設を持つものもある。丘陵頂部は、祭儀場があったものと推定されているが、そのすぐ南側に2条の環濠が廻っている。そのうちの外側の環濠は弥生時代中期段階では南側に張り出した突出部が存在したが、中期後葉に埋没後、一周廻るように平面隅丸方形に浅く掘り直

側の低地部でも土坑群が発見されているが、近年、ここでも竪穴建物跡が発見されている。弥生時代中期の段階では環濠に囲まれた範囲外の北部・北西部低地の一部でも居住域があったことがわかる。

丘陵頂部の南側に廻る環濠に4m×4m程度の空間が南側に張り出した突出部がみられ特異である（図3）。弥生時代後期後半に吉野ヶ里遺跡をはじめとする有明海沿岸で突出部のある環濠があり、七田忠昭は城郭の馬面など大陸の影響を想定している（七田1997）。原の辻遺跡例は有明海沿岸例より時期が古く、規模も小さいという差異がある。もし、仮に弥生時代中期の原の辻遺跡例と弥生時代後期後半の有明海沿岸の事例に系譜関係があれば、有明海沿岸例に同時代的な大陸の影響を想定する必要はなくなる。

弥生時代中期前葉頃から設置された環濠の中には中期後葉に濠が埋没していく状況が確認できるものも少なくない。

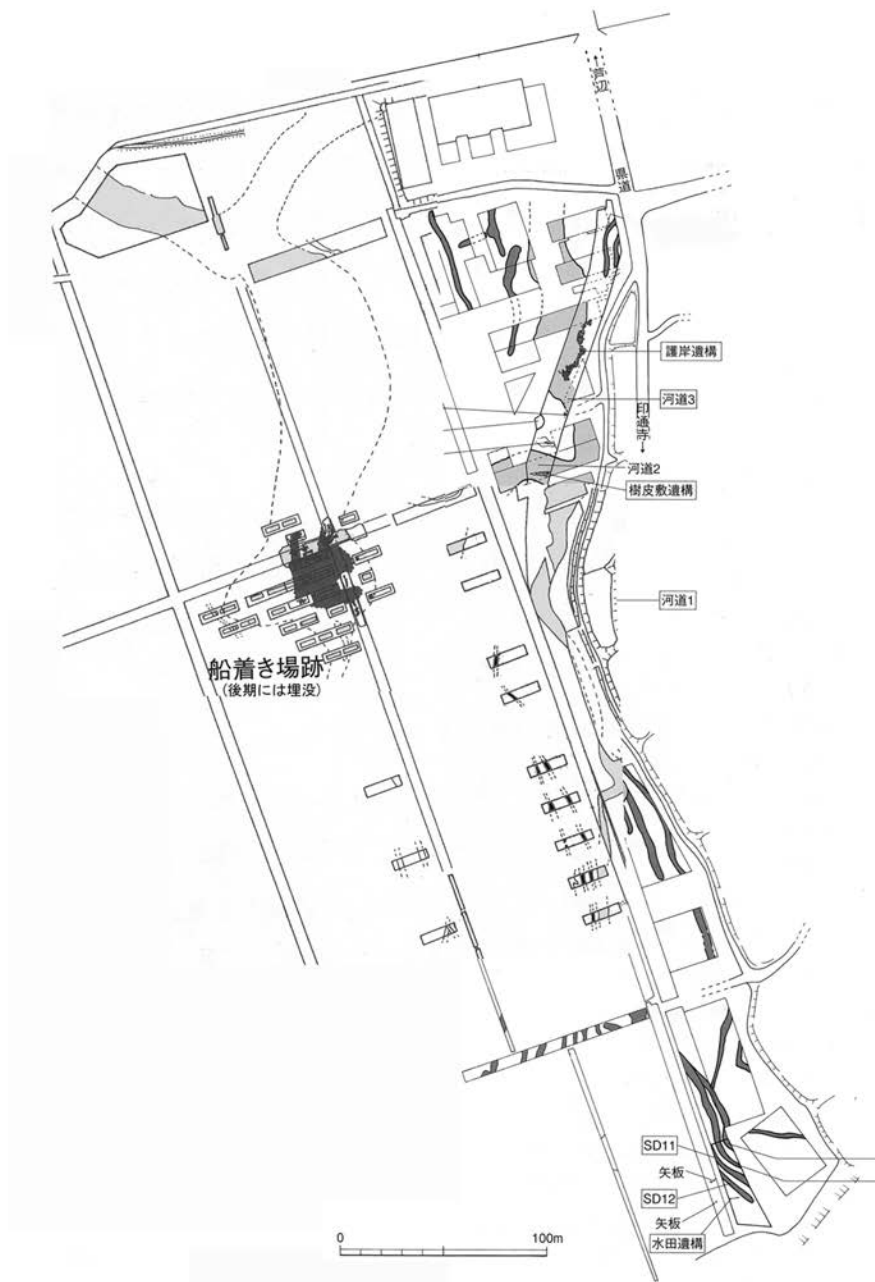


図4 弥生時代後期西側低地部の環濠

後期前葉に開削されたとみられる内側環濠で一部直角に近い形で曲がる部分が見られる。この直角に張り出した部分では地山まで大幅な後世の削平を受けていたようで、施設などは確認されていない。前述した七田忠昭が注目している有明海沿岸地域に多くみられる環濠突出部（七田 1997）との関連性も考えられる。

西側低地部では環濠を埋めた土橋が発見されている。弥生時代中期末～後期前葉に灰黄褐色の地山を掘り込んで環濠が開削されるが、この地山と酷似した性質の土で土橋が形成されている。環濠として一度掘削した後、さほど時間を置かずに、掘りあげた土を埋め戻して土橋を造成したものと考えられる。橋の断面形状は台形である。この土橋の構成土ではほぼ完形の弥生時代後期前葉の甕1個体が出土しており土橋を造る際に祭祀が行われたものと推測されている。

され、環濠の途中が周溝状遺構となる（図3）。この周溝状遺構の周溝からは多量の土器のほか、鉄剣、鉄鎌、袋状鉄斧などの鉄器が出土している。周溝状遺構は筑紫平野に多く分布する遺構で、その性格としては集落に関わる祭祀に関連するとみられている（片岡 1989・1991・1994・1996）。原の辻遺跡例は集落の中心部分で住居が希薄な地区に立地するという点で同じくクニの中心集落である吉野ヶ里遺跡や平塚川添遺跡における周溝状遺構と類似した傾向を持つとされ、原の辻遺跡が筑紫平野と繋がりを持っている可能性が指摘されている（片岡 2005）。

環濠はおおむね自然地形に沿って丘陵の裾部を取り囲んでいるが、そうではない箇所もある。祭儀場の西側で、弥生時代

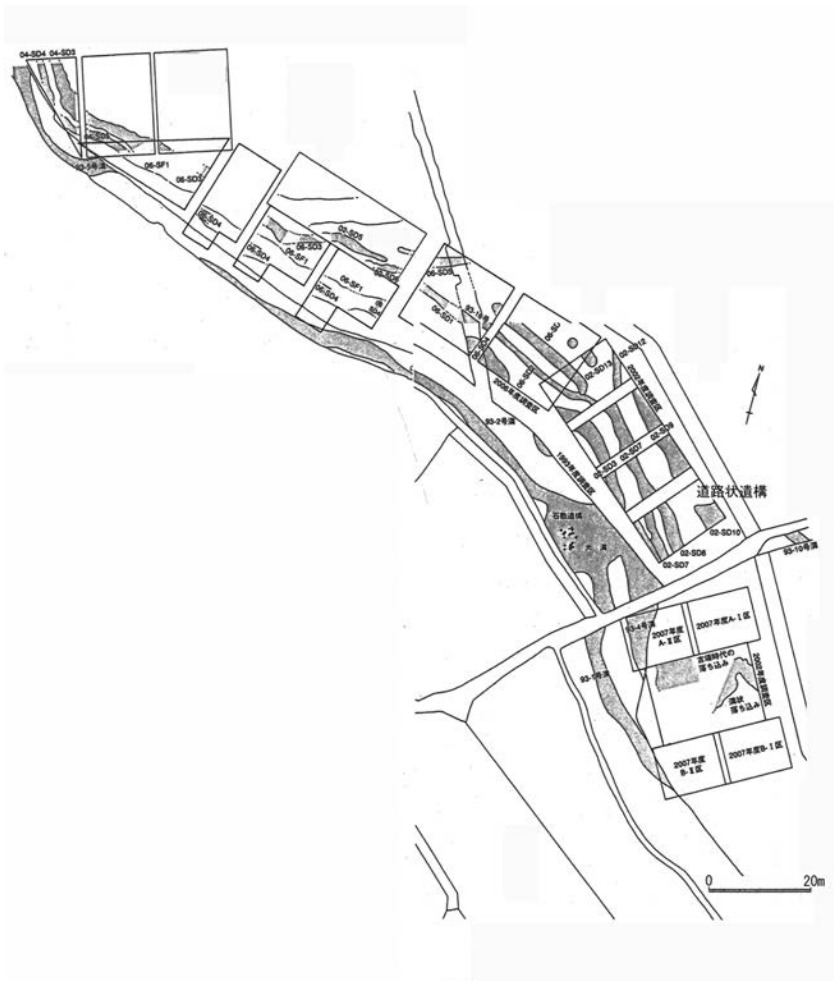


図5 弥生時代後期北東側低地部の環濠

丘陵頂部が「祭儀場」として利用されたと推定されているが、その東西に大形の竪穴建物跡があり、有力者層の住居であるとみられている。このうち「祭儀場」より東側に弥生時代終末～古墳時代初頭のベッド状遺構を持つ大形の住居跡の北側に直線的な平面形状の浅い溝が掘られる例があり、この溝が方形に取り囲む可能性もある。その場合、この住居跡があるのが環濠の内側になるので、武末の(A)類型に該当することとなるが、溝の延伸状況が不明なので、よくわからない。

4. 環濠消滅期 (図2)

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて環濠は埋没する。この際に弥生時代終末期土器や古式土師器が多量に濠の中に人為的に投棄される事例も多く確認されている。濠を人為的に埋めたり、これに伴う祭祀があった可能性が指摘できる。弥生時代後期までの環濠があった場所には古墳時代前期に溝が掘られる事例もある。また、丘陵北部低地では河川本流に向かって直線的に古墳時代の溝が設けられている。このような事例から環濠が埋まりきらず、周辺より土地が低いため集まる水に対する処置として排水溝が設けられたものと考えられる。

同じく西側低地部の環濠の底部で直径1 cm程度の竹が5 cmほどの間隔で不規則に突き刺さっているのが確認された。約3 m²の調査面積で約220本の竹が確認された。防御に用いるには竹が細く、川魚を捕らえるための施設である可能性が報告されている。筆者としては水流のごみなどを回収する「しがらみ」などの関係を考えてもよいのではないかと考えている。

武末純一は弥生時代後半期に方形環溝が現れるが、(A) 円形の中の方形、(B) 円形の外の方形、(C) 円形のない方形へと展開し、古墳時代の首長居館へと繋がるとする(武末1998、2002)。原の辻遺跡では丘

Ⅲ. 原の辻遺跡における環濠の目的・用途

弥生時代の集落に廻る環濠の目的や用途についてはさまざまな見解が示されている。「方形環濠」成立以前の環濠についてのこれまでの見解については山崎頼人が的確に整理しているが（山崎 2010）、この整理に従うと、原の辻遺跡は環濠内部に居住施設を伴う環濠なので、環濠の機能としてはA視覚的・物理的結界・区別、B防衛・防禦、C防水害・利水、Dその他の可能性が想定されることとなる。また、掘削行為自体の機能について、象徴的施設（モニュメント）、集落維持装置、共／協同性の体現なども考えられる。

まず、環濠の目的として伝統的に考えられてきたB防衛・防禦の可能性であるが、原の辻遺跡の場合、対人的な防衛・防禦の具体的な痕跡について想定が困難な部分がある。西側低地部の弥生時代後期に掘削されたとみられる環濠覆土の下位層から少なくとも成人男性8体、成人女性2体、小児1体の人骨が出土している。出土状況から遺体そのものを環濠内に乱暴に遺棄されたものとみられており、内1体の右側脛骨には創痕が認められた（分部 2006）。一般的な埋葬とは異なる状況ではあるが、これが戦乱に伴う死者であるとは断定できない。丘陵南部の断面V字環濠の一部では環濠底部にピットが発見され、逆茂木や杭列の存在が推定されている。しかし、このような施設は環濠全体に廻っているわけではない。また、対害獣用の可能性もある。そもそも壱岐島では敵対勢力の存在が考えにくい。原の辻遺跡以外にカラカミ遺跡と車出遺跡に目立つ勢力が存在するが、それらの集落と抗争していたと考えられない。島外とも交流回路を維持していた原の辻遺跡の集団が島外の勢力と抗争したとも考えにくく、実際の抗争に伴う防衛・防禦に利用されたとは考えにくいのではないだろうか。

C防水害・利水は十分に考えられる目的で、低地部の環濠では断面逆台形やU字形が多く、水流があったと想定される砂層が検出されたり、有機物が多く含まれる層なども認められている。ただし、丘陵南部の断面V字形の環濠については空堀であったと想定されており、全ての環濠が防水害・利水の目的で構築されたわけではない。

A視覚的・物理的結界・区別については原の辻遺跡では可能性が十分にある。特に、弥生時代中期に韓半島から渡航した集団は環濠外の北西低地部の微高地を中心に弥生人と雑居状態で存在したことがわかっている（宮崎 2001、古澤 2016）。また、河川本流より北側の低地では、遠賀川以東系の土器が集中して出土する居住域があり、遠賀川以東との繋がりが深い集団も環濠外に存在した。このように弥生時代中期の段階では環濠の内外で、集団の性格が異なることが確認されている。

以上を総括すると、広瀬和雄による「環濠の第一義的な目的が防衛だったことは否定しがたい場合もあるが、「環濠集落」が常時堅固な守りを備えていたわけではなく、掘削当初は防禦のために圍繞された濠であっても、いつの日かそれは形骸化し、平和裡には環濠の内と外という識別、ビジュアルな境界としての役割が、前面に押し出されていた」とする指摘（広瀬 1998）は原の辻遺跡ではよくあてはまる。

掘削行為自体の機能として豆谷和之は「環濠」の機能を排水や防禦に限定するのであれば、多重であることの必要性はなく、場所によって多重になることの説明がつかないとし、大溝掘削という共同作業の場を設け、そこに労働力を集約させることで、大集落を維持していくための装置となり、可視的に集落の結束力を示したと想定している（豆谷 2003）。この見解は環濠構築の労働力に注目した興味深い見解であるが、構築に大きな労働力を必要とするのは環濠だけではないので、なぜ環濠なのか

という追加の説明も必要となろう。こうした説明と場所によって多重になることの説明について筆者は弥生時代後期の原の辻遺跡の様相が重要であると考えている。

弥生時代後期になると原の辻遺跡の丘陵北側低地部で多重の環濠が新設される（図4、図5）。中尾祐太は弥生時代後期の環濠多重化について同一集落内のグループが濠を挟んで階層化したと想定しているが（中尾2012）、原の辻遺跡の場合、丘陵北側低地部の多重環濠はその配置密度は極めて高く、濠の間に集住できる状況ではないから、この想定はあてはまらない。丘陵南部と比べて土地の低い北側低地部では水の問題が生じるので、給・排水などに利用された可能性はある。

筆者は対外交流の拠点としての原の辻遺跡の性格を重視し、対外関係との関係から環濠の目的を捉えてみたいと思う。原の辻遺跡における大陸・半島系土器は、弥生時代後期には環濠内部の丘陵北部を中心とする地区に多く分布し、丘陵南部にはほとんどみられない。このことから、大陸・半島からの渡航者の滞在地は丘陵北部であったと考えられる（宮崎2001、古澤2016）。大陸・半島からの渡航者が内海湾から幡鉾川を遡上し、最初に目にするのは丘陵北先端部であったものとみられ、いわば対外的な意味での集落の表玄関は丘陵北先端部であったものと考えられる。そしてこの区域にこそ増設された環濠が密集しており、北東側低地部では環濠が途切れたところに道路状遺構が設置されている。反対に周溝状遺構より南側の丘陵部は集落でも裏手にあたり、環濠の分布密度も粗である。筆者は大陸・半島からの渡航者の目的が弥生時代中期では移住の中継と交易であった一方、後期には交易と外交を目的としたものへ変化したと考えている。弥生時代後期に漢と倭のクニグニは正式な外交関係を結んだことが文献から明らかであるが、壱岐における具体的な外交の証拠として原の辻遺跡やカラカミ遺跡で出土する遼東系資料に注目している（古澤2017、古澤・片多2017）。そのような外交使節を迎えるにあたっては、一支国の威容を示すことが重要となる。このことが後期に増設された多重の環濠に期待された役割ではなかったらうかと推測している。つまり、後期に高密度で丘陵北側低地部に増設された環濠には実用的な防禦機能ではなく、ショウウィンドウのように集落の威容を演出する目的があった可能性を考えている。このように集落の威容を示すという環濠の目的を原の辻遺跡以外の遺跡でも想定できるかどうかは今後の課題となるが、集落の対外的な表玄関と環濠との相関を他の遺跡でも調べてみることは無益なことではないだろうと思う。

文献

- 片岡 宏二 1989・1991・1994・1996
『周溝状遺構』の検討（その1～4）『福岡考古』14・15・16・17
- 片岡 宏二 2005 「原の辻遺跡発見の周溝状遺構とその意義」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
- 川畑 敏則 2007 「石田高原地区の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第36集
- 川畑 敏則 2008 「石田高原地区の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第38集
- 川畑 敏則 2011 「弥生時代中期の丘陵西側低地部の状況について」〔1号濠について・2号濠について〕『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 七田 忠昭 1997 「有明海沿岸地方の弥生時代環濠集落にみる大陸的要素（予察）」『佐賀考古』4
- 武末 純一 1990 「北部九州の環濠集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
- 武末 純一 1998 「弥生環濠集落と都市」『古代史の論点3 都市と工業と流通』小学館
- 武末 純一 2002 『日本史リブレット3 弥生の村』山川出版社
- 中尾 篤志・福田 一志 2005
「環濠」『原の辻遺跡総集編I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
- 中尾 祐太 2012 「拠点環濠集落の再検討」『国際文化研究論集』6
- 林 隆広 2008 「原地区の調査」『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第38集
- 広瀬 和雄 1998 「弥生都市の成立」『考古学研究』45-3
- 古澤 義久 2016 「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『勒島와 하루노쓰지를 통해 본 東아시아 交流의 様相』国立晋州博物館
- 古澤 義久 2017 「弥生時代土器からみた日韓交流」『考古学으로 본 三韓時代 東아시아 文化交流』釜山博物館
- 古澤 義久 2018 「総括」『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第27集
- 古澤 義久・片多 雅樹 2017
「原の辻遺跡出土遼東系銅釧について」『九州考古学』92
- 松見 裕二 2015 『海の王都・原の辻遺跡と壱岐の至宝』壱岐市教育委員会
- 豆谷 和之 2003 「弥生環濠論」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会
- 宮崎 貴夫 2001 「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』4
- 山崎 頼人 2010 「環濠と集団」『古文化談叢』65（2）
- 分部 哲秋 2006 「弥生人骨が語る一支国のすがた」『平成17年度・原の辻大学講座 Dr. ハルの原の辻をもっと知ろう塾講演記録誌』長崎県教育委員会・原の辻遺跡保存等協議会

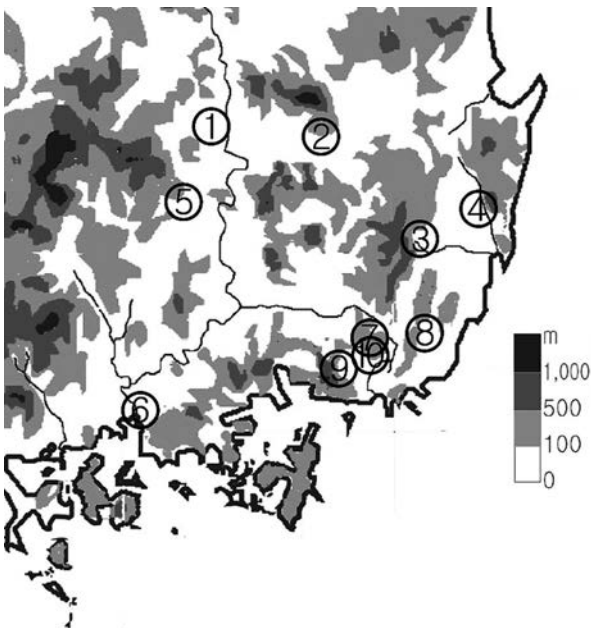
영남 지역 삼한시대 환호의 성격 검토

부산박물관 김유정

I . 머리말

삼한시대는 한반도 중남부지역에 마한·진한·변한이라는 소국연맹체들이 존재했던 시기를 일컫는 말로, 고고학적인 시대구분에 따르면 청동기시대 후기와 삼국시대 사이에 해당하며, 사회발전단계 면에서는 대규모 농업공동체 성향의 족장사회에서 고대국가로 나아가는 중간단계로서 인식되고 있다(윤형준 2009). 삼한시대는 점토대토기와 목관묘, 얇은 수혈의 주거지 등 청동기시대와는 다른 물질 문화의 변화를 보여주고 있다. 그러나 환호는 한반도의 청동기시대 후기부터 그 수가 급증하는 유구로서 삼한시대 후기에 급감할 때까지 그 전통이 이어져 온다. 청동기시대 환호와 비교(김유정 2012) 하는 것이 삼한시대 환호의 성격을 더 분명하게 드러낼 수 있겠지만, 본고에서는 영남지역 삼한시대 전기와 후기의 환호를 검토하여 당시의 환호의 역할을 고찰해보고자 한다.

II . 유적의 검토



도 1. 영남지역 삼한시대 환호유적 위치
(圖 1. 嶺南地域三韓時代環濠遺跡の位置)

영남지역 삼한시대 환호유적으로 알려진 곳은 10 여 개소이다. 주로 삼한시대 전기의 유적인데, 삼한시대 전기 취락유적이 50 여 개소 정도 확인되었으므로 환호라는 유구가 유적에서 흔히 확인되는 것은 아니다. 환호 유적의 수가 많지 않기 때문에 영남지역에 한정하여 지도에 표시하는 것이 본고에서 유의미한 것은 아니지만, 정보를 제공하는 의미에서 제시(도 1) 해두기로 하겠다. 또한 영남지역 삼한시대 환호의 특징을 담은 목록은 한반도 남부지역 환호에 대해서 발표된 논고(이수홍 2015)에 수록된 표의 일부(표 1)를 발췌·수정하였다.

III . 삼한시대 환호의 특징

영남지역 삼한시대 환호는 전기와 후기를 망라하여 모두 입지에서 공통점을 찾을 수 있다. 내륙의 구릉성 산지의 말단부에 위치할 경우는 주변의 구릉보다 돌출된 부분에, 해안에 위치한 경우는 만(灣)의 독립된 구릉에 유적이 있다. 즉 주변의 낮은 구릉이나 평지를 조망하기에 최적화되어 있는 곳에 자리하고 있는 것이다. 이러한 입지를 지닌 삼한시대 전기의 환호와 후기의 환호는 형태적 특징에서 그 차이점을 찾을 수 있다.

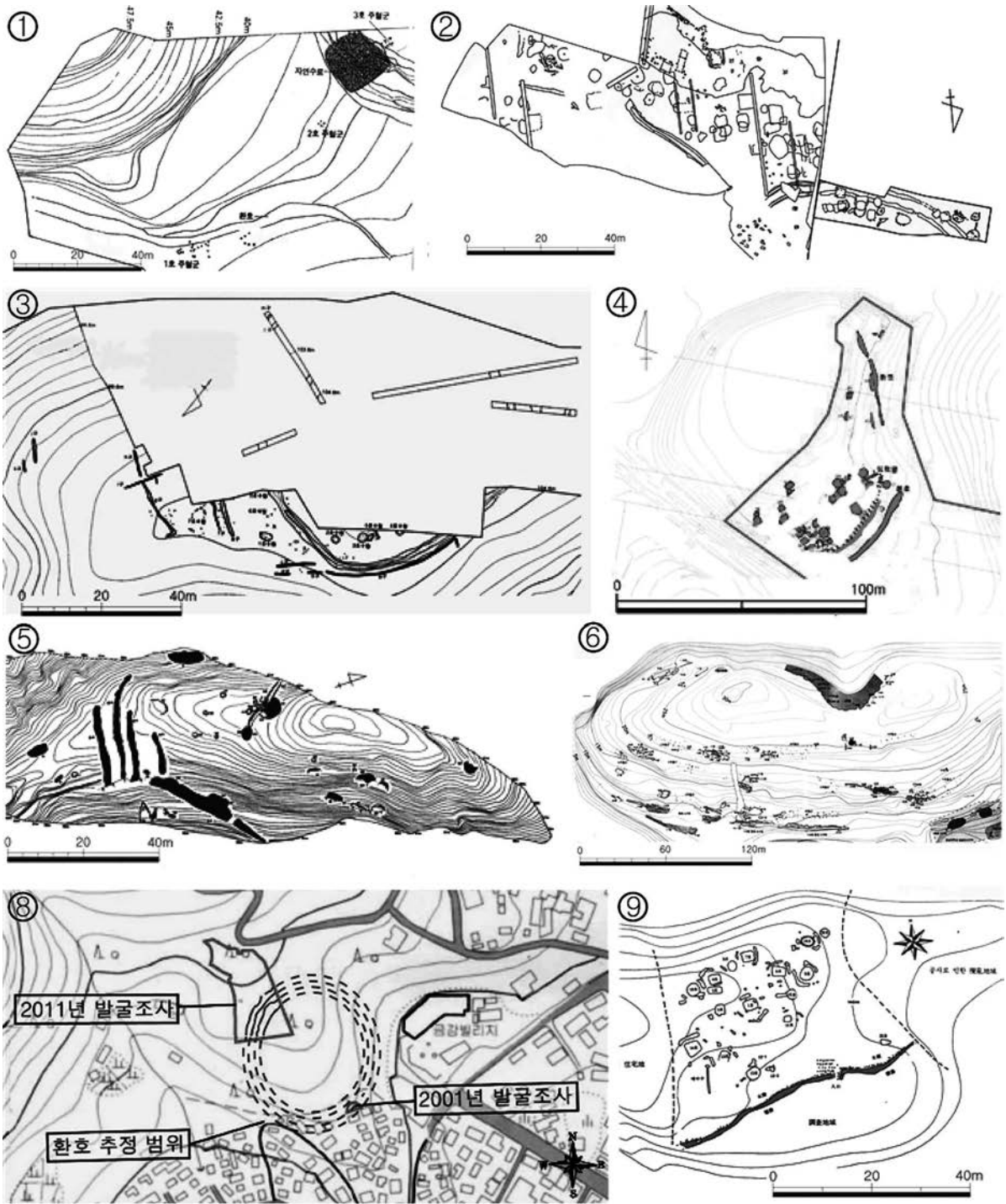
1. 삼한시대 전기

삼한시대 전기의 환호는 성주 상언리유적, 경산 임당유적, 울산 교동리유적, 울산 달천유적, 합천 영창리유적, 사천 방지리유적, 김해 대성동유적, 부산 온천동유적 등이 있다. 이들 유적은 환호 열의 수, 공반 유구에서 특징을 찾을 수 있다.

첫 번째, 성주 상언리유적을 제외한 영남지역 삼한시대 전기의 환호 유적은 연속적 혹은 단속적인 다중 환호이다. 열의 수적 특징을 살펴보면 경산 임당유적과 같이 2 열의 폭이 유사하게 둘러진 것, 울산 교동리유적과 같이 넓은 폭의 주환호와 좁은 폭의 외호로 둘러진 것, 울산 달천유적과 같이 좁은 폭의 내호와 넓은 폭의 주환호로 둘러진 것, 합천 영창리유적과 같이 한쪽 사면만 4 열로 된 것, 사천 방지리 유적과 같이 폭과 열이 불규칙한 것 등으로 유적 수 만큼 그 형태가 다양하다. 그러나 이들 모두 2 열 이상의 다중환호라는 것은 공통된 특징이다.

표 1

시대	번호	유적	입지	열	평면 형태	내부 시설	조사기관	비고
전기	1	성주 상언리유적	구릉	1 열	부정형	주혈	경북문화재연구원	
	2	경산 임당유적	구릉	2 열	호형	?	영남문화재연구원	
	3	울산 교동리유적	구릉	주환호 + 외호	원형	?	울산문화재연구원	
	4	울산 달천유적	구릉	내호 + 주환호	호형	수혈	울산문화재연구원	
	5	합천 영창리유적	산정	4 열	호형	수혈	경남고고학연구소	
	6	사천 방지리유적	구릉	2 열	호형	수혈	경남발전연구원	
	7	김해 대성동유적	구릉	1 열	?		경성대학교박물관	보고서 미발간
	8	부산 온천동유적	구릉	2 열	원형	?	부산박물관	보고서 미발간
후기	9	양산 평산리유적	구릉	1 열	타원형	주거지	동아대학교박물관	
	10	김해 봉황대유적	구릉	?	?	?	부산대학교박물관	시굴 조사



도 2. 영남지역 삼한시대 환호 유구배치도
 (图 2. 嶺南地域三韓時代環濠遺構配置圖)

두 번째, 환호 내에 삼한시대 전기의 일반적인 주거지가 확인되지 않는 점이다. 물론 경산 임당유적, 울산 교동리유적, 김해 대성동유적, 부산 온천동유적 등 환호 내부에 대한 전면 발굴조사가 이루어지지 않은 점에서 한계가 있는 주장이다. 그러나 환호 내부 공간의 발굴조사가 진행된 유적을 살펴보면 기 조사된 삼한시대 전기 취락과는 다른 특징을 보인다. 성주 상언리유적에서는 환호보다 해발고도가 높은 곳에서는 시기를 알 수 없는 주혈군 1 조만 확인되었으며, 울산 달천유적의 경우 환호가 채광유구와 중복 관계를 보이며, 구릉 정상부를 중심으로 방사상으로 배치된 소수의 수혈을 포위하고 있는 형태이다. 합천 영창리유적의 수혈에서는 세형동검이 바닥에 꽂힌 채 출토되었는데, 분묘가 아닌 유적에서 세형동검이 출토되는 것은 드문 일이다. 사천 방지리유적의 경우 환호 내부 수혈이 중복 관계를 보이며 군집을 이루고 있고, 환호 내측 굴광에 인접해 깊이가 얇은 수혈이 다수 축조된 특징을 보여 환호 내부 공간이 일정 기간 동안 반복적으로 사용되었을 것으로 추정된다. 울산 교동리유적에서는 삼한시대의 것으로 보이는 수혈이 열을 지어 확인되었지만, 환호를 의식하지 않은 듯한 일렬의 배치로 환호와 동시기의 유구는 확인되지 않았다.

2. 삼한시대 후기

영남지역에서는 삼한시대 후기의 것으로 볼 수 있는 유적은 양산 평산리유적과 김해 봉황대유적이다. 김해 봉황대유적의 전모는 확인되지 않았지만, 양산 평산리유적의 경우 환호 내부에 특별한 특징을 가지지 않는 취락이 확인되었다. 한편, 환호의 열을 따라 목책이 공반되고 있는데, 이를 방어기능의 강화와 관련하여 사회적 긴장에 의한 취락 보호의 역할 (이수홍 2015) 을 제시하기도 한다. 유적 수의 감소에 대해서 중국 토성의 영향 (이성주 1998) 이라는 견해, 삼국시대로 나아가는 단계로서 각지의 국이 통합의 과정을 거치면서 생긴 현상 (이수홍 2015) 이라는 견해가 있다.

IV. 삼한시대 환호의 역할

앞 장에서 살펴보았듯이 삼한시대 후기의 환호는 방어적 역할이 도드라져 보이는 반면 전기의 환호는 취락의 방어를 위한 것이 아니라 다른 역할이 있었던 것이 아닐까 의심된다. 한편, 환호 내에서 소형토기와 두형토기가 출토되고, 파수부 토기 등 의도적인 훼손이 의심되는 유물이 출토되고 있어, 환호 유구 자체의 의례 행위의 흔적으로 보이기도 한다. 출토유물의 특징도 중요하지만, 본고에서는 지면 관계상 유적의 전체적인 양상에 주목하여 삼한시대 전기 환호의 역할에 대해 조금 더 생각해보고자 한다.

1. 의례적 요소

환호는 주거지나 분묘에 비하여 대규모의 노동력을 필요로 하는 유구이다. 구릉사면의 일부 또는 전체를 둘러가며 굴착하여 그 형태를 형성하기 때문이다. 특히 삼한시대 전기의 환호처럼 다수의 열로 조성하거나, 후기의 환호처럼 목책까지 설치하려면 많은 품이 들 것이라는 것은 가히 상식적이다. 이렇게 조성된 환호는 존재 자체만으로도 환호의 내부와 외부의 경계가 생기게 된다는 것은 주지의 사실이다. 또한 취락 내 일부 공간을 담아 환호의 범위를 조성한 청동기시대의 환호유적과는 달리, 삼한시대 전기 환호유적은 환호를 축조하기 위한 구릉을 선택하여 조성하였으며, 다중의 환호로 내부 공간의 폐쇄성을 강조했다.

삼한시대 전기의 환호는 후기의 것보다 방어적 성격이 드러나지 않는데, 그렇다면 이 시기 환호의 내부 공간을 관찰하면 그 역할을 추정할 수 있을 것이다. 환호의 내부 공간은 그 규모에 비해 수혈 등 유구 수가 매우 적게 확인 (울산 달천유적, 합천 영창리유적, 사천 방지리유적 등) 된다. 또한 환호 유적에서 확인되는

수혈이 다른 삼한시대 취락의 주거지와 구조나 규모 면에서 차이가 나지 않아 주거 간의 서열을 상정하기도 어렵다. 소수의 주거지가 환호 내의 공간을 영위한 것을 보면 두 가지 추측이 가능하다. 하나는 환호 내의 공간을 영위한 주체가 주변의 주거 집단보다 우위이거나 대표성을 가질 가능성, 또 하나는 주변과 분리되어 별개의 행위를 위한 공간일 가능성이 있다. 전자일 경우 유구의 상태와 출토 유물에서 우열관계가 입증되어야 하는데 현재까지 근거가 되는 고고학적 자료는 없어 후자일 가능성이 더 크다고 생각한다.

환호의 역할에 대해 두 가지 가능성을 제시해보고자 한다. 하나는 환호가 조성되었을 당시 내부 공간이 광장처럼 아무시설도 없었을 가능성이다. 청동기시대 대규모 취락에서 종종 보이는 취락 가운데 평탄면에 아무 시설도 확인되지 않아 광장으로 추정되기도 한다. 따라서 환호 내부 공간도 사람들이 모이는 광장의 역할을 했던 것은 아닐까. 그러나 광장은 출입이 수시로 가능하고, 많은 사람들이 동시에 출입할 수 있는 구조여야 할 것인데, 환호는 도랑이라는 태생적 구조로 볼 때 광장과 같은 기능을 하기는 어려웠을 것이다. 더구나 2 열 이상의 다중 환호로 축조된 삼한시대 전기의 환호의 특성으로 볼 때 환호의 내부 공간이 폐쇄성으로 더 강조되고 있다. 환호의 내부가 외부로부터 분리되면서 출입도 자유롭지 않아야 할 장소였을 가능성이 커지게 되는 대목이다. 여기서 두 번째 가능성이 발현되는데, 의례 공간이었을 가능성이다.

삼한시대 전기 환호는 주변보다 약간 돌출된 구릉을 택하여 그 정상부 평탄면을 감싸거나 완만한 구릉 사면을 둘러싸는 형태로 조성되었다. 주변보다 돌출된 구릉은 우선 조망권이 확보되어 있다고 볼 수 있다. 환호의 내부 중심에서 주변으로 시야가 트여 있고, 외부에서도 환호 내부가 잘 보인다. 외부에서 환호 내부가 잘 보인다는 점은 환호가 방어적 역할을 했다는 점과 배치되는 개념이다. 또한 주변보다 약간 돌출된 구릉은 자연스럽게 주변으로의 연결 길목에 입지하기 때문에 현재의 개념으로도 교통상의 요지로 인식하게 된다. 주변과의 관계에서 중심에 있었을 가능성도 있어 취락 내에서 중요한 역할 중 하나를 수행했을 가능성도 제기된다.

특히 합천 영창리유적 28 호 수혈에서는 주로 분묘에서 발견되는 세형동검이 바닥에 꽂힌 채 출토되었는데, 이는 수혈에서 어떤 의식적 행위가 있었을 것으로 주목되어 왔다. 영남지역의 삼한시대 전기 환호의 전모가 발굴조사된 것은 드물기 때문에 합천 영창리유적과 같이 환호 내에 있었던 상황들을 적극적으로 반영한 유적은 아직까지 보고된 바 없다. 따라서 이 시기 다른 지역의 유사한 형태를 참고하여 일부 추정해 볼 수 있다. 성주 상언리유적과 유사한 형태를 보이는 수원 울전동유적도 환호 이외의 유구는 확인되지 않았다. 특히 안성 반제리유적은 환호의 중심에 윗면이 평편한 거대한 자연석이 제단으로 추정되고 있어, 환호의 의례적 성격을 보여주는 가장 확실한 단서로 보인다. 거대한 자연석이 제단까지는 아니더라도, 취락 내의 거대한 상징물로 인식되었을 것이다. 거석문화의 전통은 청동기시대 지식묘에서부터 이미 나타나므로, 거대한 자연석에 대한 당시 사람들의 숭배의식이 있었을 가능성은 충분하다.

의례행위는 일상생활에서 의식주를 영위하는 것 만큼 일상적으로 일어나는 행위이다. 그러나 환호와 같은 하나의 상징물 안에서만 치러졌던 의례행위는 환호를 축조한 집단 전체를 위한 것이라 생각된다. 환호와 같은 대규모 굴착유구를 축조할 수 있었던 배경 또한 집단 전체를 위한 노력이라고 할 수 있을 것이다. 삼한시대에 집단의 의례행위를 상정할 수 있는 사회 현상은 무엇이였을까.

2. 소도와 환호

문헌사에서는 물론이고 고고학적 증거로 삼한시대 환호유적을 삼한사회의 소도와 연결해보려는 시도(김유정 2015, 나혜림 2017, 이형원 2018)는 최근 몇 차례 있었다. 이는 삼국지 위지 동이전에서 전해지는 마

한의 기사와 비교 검토하면서 이루어진 것이다. 삼국지의 기사는 실제 삼한시대 전기와 기록 당시의 시간적 간극이 있어 맹신할 수 없는 것이지만 문화나 풍속에 대한 전승도 기록되었을 가능성이 높다는 것도 고려할 필요가 있다 (이형원 2018).

삼국지 위지 동이전에서 언급한 삼한사회의 모습에서 별읍에 주목하고자 한다. 별읍은 ‘소도(蘇塗)’라는 명칭으로 불린다고 한다. 소도는 정치적 중심인 군장의 국읍과 달리 소국의 천군이 관장하는 범위라고 한다. 천군은 ‘하늘에 제사지내는 사람’으로 삼한사회를 제정분리사회로 보는 근거가 된다. 소도는 신성한 공간으로 제사를 거행하는 제장으로 해석될 수 있다. 또한 제장 안에 도주한 사람은 돌려보내지 않는다는 점에서 외부와 차단된 공간임을 알 수 있다. 이 곳에서 5 월과 10 월에 주기적인 농경의례를 치렀다는 점도 농경사회에서 소도의 사회적 위치를 알 수 있는 부분이다.

다만, 이러한 가정은 국읍과 별읍, 국읍 아래의 소국 단위에 대한 개념을 고고학에서 적용할 수 있을 때 성립되는 것이다. 취락 연구의 흐름이 중심과 주변을 상정하여 진행되고 있으므로 앞으로 삼한시대 취락고고학에서 더 발전된 연구가 등장할 수 있을 것이다.

V. 맺음말

영남지역 삼한시대 환호에 대한 대략적인 내용을 살펴보았다. 삼한시대 환호는 구릉 정상부를 감싸거나, 구릉 사면에 걸쳐서 둘러지거나, 구릉 사면 하단부에 형성되어 구릉 전체를 감싸는 형태를 보이고 있다. 이러한 구릉들은 주변의 지형에 비해 약간 돌출되는 등 독립적인 위치라고 할 수 있다. 환호를 축조하기 위한 입지의 선택이 있었던 것이다. 삼한시대 전기의 환호에서는 내부 공간의 크기에 비해 수혈 등의 유구 수가 적고, 수혈 내에서 의례 행위의 흔적이 확인되기도 하였다. 이러한 환호의 특징으로 볼 때 전기의 환호는 방어의 목적이라기 보다는 의례 장소의 하나로 역할 하였던 것 같다. 삼한시대 의례 장소를 문헌자료에서는 소도라고 특정하고 있어 이와의 연관성을 짚어 보았다.

지면 관계상 출토유물과 유구에 대한 꼼꼼한 검토가 이루어지지 않아 논리적인 비약과 성급한 일반화가 곳곳에 보인다고 자평할만큼 송구스러운 글이 되었다. 향후 논지를 발전시켜 체계적인 논고를 다시 선보이게 될 수 있기를 바란다.

참고문헌 (보고서 생략)

- 김동호, 2016, 『원삼국기 임당지역 정치체의 사회 구성 단위와 활동』, 영남대학교대학원 석사학위논문.
- 김유정, 2012, 『청동기·삼한시대 환호의 변화와 성격』, 부산대학교대학원 석사학위논문.
- 김유정, 2015, 『동래 온천동 유적 환호의 의의 - 환호의 의례적 요소와 삼한사회의 소도 -』, 『박물관연구논집』 21, 부산 박물관.
- 김정배, 1978, 『소도의 정치사적 의미』, 『역사학보』 79 집, 역사학회.
- 나혜림, 2017, 『보령 명천동 유적을 중심으로 본 소도와 의례공간』, 『백제학보』 제 22 호, 백제학회.
- 문창로, 2013, 『삼한 ‘소도’ 인식의 전개와 계승』, 『한국학논총』, 국민대학교 한국학연구소한문학연구실.
- 송화섭, 1994, 『마한사회의 성립과 역사적 의의』, 『한국고대사연구』 제 7 권, 한국고대사학회.
- 송화섭, 1995, 『삼한사회의 종교의례』, 『한국고대사연구』 제 7 권, 한국고대사학회.
- 윤형준, 2009, 『목관묘문화의 전개와 삼한 전기사회』, 부산대학교 대학원 석사학위논문.
- 이상길, 1998, 『무문토기시대의 생활의례』, 『환호취락과 농경사회의 형성』, 영남고고학회·구주고고학회.
- 이상길, 2000, 『청동기시대 의례에 관한 고고학적 연구』, 대구카톨릭대학교대학원 박사학위논문.
- 이성주, 2012, 『의례, 기념물, 그리고 개인묘의 발전』, 『호서고고학』 26, 호서고고학회.
- 이수홍, 2015, 『한반도 남부지역 청동기 ~ 삼한시대 환호유적의 변화와 성격에 대하여』, 『국립역사민속박물관연구보고』 제 195 집.
- 이형원, 2018, 『삼한 소도의 공간 구성에 대한 고고학적 접근 - 중부지역의 환구 유적을 중심으로 -』, 『백제학보』 제 24 호, 백제학회.
- 최종규, 1996, 『한국 원시의 방어집락의 출현과 전망』, 『한국고대사논총』 8.

嶺南地域三韓時代環壕の性格検討

釜山博物館 金 宥正

I. はじめに

三韓時代は韓半島中南部地域に馬韓・辰韓・弁韓という三国連盟体が存在した時期を指している言葉で、考古学的な時期区分によると青銅器時代後期と三国時代の間該当し、社会発展段階の面では大規模農業共同体性向の族長社会から古代国家に発展する中間段階として認識されている(윤형준 2009)。三韓時代は粘土帯土器と木棺墓、浅い竪穴の住居址など青銅器時代とは異なる物質文化をみせている。しかし環壕は韓半島の青銅器時代後期からその数が急増する遺構で、三韓時代後期に急減するまでその伝統が引き継がれてきた。青銅器時代の環壕と比較(김유정 2012)することが三韓時代の環壕の性格をより明らかにすることができるが、本稿では嶺南地域の三韓時代前期と後期の環壕を検討し、当時の環壕の役割を考察しようと思う。

II. 遺跡の検討

嶺南地域の三韓時代環壕遺跡として知られた場所は10箇所余りである。主に三韓時代前期の遺跡であるが、三韓時代前期の集落遺跡が50箇所程度確認されていることからみれば、環壕という遺構が遺跡でよく確認されるものではない。環壕遺跡の数が多くないために嶺南地域に限定し、地図に表示することは本稿で有意義なものではないが、情報を提供する意味で提示(図1)しておきたい。また、嶺南地域の三韓時代環壕の特徴を盛り込んだ目録として韓半島南部地域の環壕について発表された論考(이수홍 2015)に収録された表の一部(表1)を抜粋・修正した。

III. 三韓時代環壕の特徴

嶺南地域の三韓時代の環壕は前期と後期を含めて、全て立地において共通点を見つけることができる。内陸の丘陵性山地の末端部に位置する場合は周辺の丘陵より突出した部分に、海岸に位置する場合は湾の独立した丘陵に遺跡がある。周辺の低い丘陵や平地を眺望するのに最適化されているところに位置しているのである。このような立地を持った三韓時代前期の環壕と後期の環壕は形態的特徴に、その差異点を見つけることができる。

1. 三韓時代前期

三韓時代前期の環壕は星州上彦里遺跡、慶山林堂遺跡、蔚山校洞里遺跡、蔚山達川遺跡、陝川盈倉里遺跡、泗川芳芝里遺跡、金海大成洞遺跡、釜山温泉洞遺跡等がある。これらの遺跡は環壕列の数、共伴遺構に特徴をみつけることができる。

第一に、星州上彦里遺跡を除外した嶺南地域三韓時代前期の環壕遺跡は連続的または断続的な多重の環壕である。列の数的特徴をみると、慶山林堂遺跡のように2列の幅が類似するように廻るもの、蔚山校洞里遺跡のように広い幅の主環壕と狭い幅の外壕として廻るもの、蔚山達川遺跡のように狭い幅の内壕と広い幅の主環壕として廻るもの、陝川盈倉里遺跡のように一方の斜面のみ4列となるもの、

泗川芳芝里遺跡のように幅と列が不規則なものなどで、遺跡の数ごとにその形態が多様である。しかしこれらは全て2列以上の多重環壕ということは共通した特徴である。

第二に、環壕内に三韓時代前期の一般的な住居址が確認されない点である。もちろん慶山林堂遺跡、蔚山校洞里遺跡、金海大成洞遺跡、釜山温泉洞遺跡など環壕内部についての全面的な発掘調査がなされない点から限界がある主張ではある。しかし、環壕内部の空間の発掘調査が進行した遺跡をみると、調査された三韓時代前期の集落とは異なる特徴をみせる。星州上彦里遺跡では環壕より海拔高度が高いところでは時期を知ることができない柱穴群一組のみ確認され、蔚山達川遺跡の場合、環壕が採鉱遺構と重複関係をみせ、丘陵頂上部を中心に放射状に配置された少数の堅穴を包囲している形態である。

陝川盈倉里遺跡の堅穴では細形銅剣が床面に刺さったまま出土したが、墳墓ではない遺跡から細形銅剣が出土することは稀有なことである。泗川芳芝里遺跡の場合、環壕内部の堅穴が重複関係をみせ、群集をなしており、環壕内側の掘方に隣接して深さが浅い堅穴が多数築造された特徴をみせ、環壕内部の空間が一定期間の間反復して使用されたものと推定される。蔚山校洞里遺跡では三韓時代のものとみられる堅穴が列をなして確認されているが、環壕を意識しないような一列の配置で環壕と同時期の遺構は確認されていない。

表 1

時代	番号	遺 跡	立地	列	平面形態	内部施設	調査機関	備考
前期	1	星州 上彦里	丘陵	1列	不整形	柱穴	慶北文化財研究院	
	2	慶山 林堂遺跡	丘陵	2列	弧形	?	嶺南文化財研究院	
	3	蔚山 校洞里遺跡	丘陵	主環壕 + 外壕	円形	?	蔚山文化財研究院	
	4	蔚山 達川遺跡	丘陵	内壕 + 主環壕	弧形	堅穴	蔚山文化財研究院	
	5	陝川 盈倉里遺跡	山頂	4列	弧形	堅穴	慶南考古学研究院	
	6	泗川 芳芝里遺跡	丘陵	2列	弧形	堅穴	慶南発展研究院	
	7	金海 大成洞遺跡	丘陵	1列	?		慶星大学校博物館	報告書未発刊
	8	釜山 温泉洞遺跡	丘陵	2列	円形	?	釜山博物館	報告書未発刊
後期	9	梁山 平山里遺跡	丘陵	1列	楕円形	住居址	東亜大学校博物館	
	10	金海 鳳凰台遺跡	丘陵	?	?	?	釜山大学校博物館	試掘調査

2. 三韓時代後期

嶺南地域では三韓時代後期のものとみることができる遺跡は梁山平山里遺跡と金海鳳凰台遺跡である。金海鳳凰台遺跡の全貌は確認されていないが、梁山平山里遺跡の場合、環壕内部に特別な特徴を持たない集落が確認された。一方、環壕の列に沿って木柵が共伴しているが、これを防御機能の強化と関連させ、社会的な緊張による集落保護の役割（이수홍 2015）が提示されてもいる。遺跡数の減少について中国の土城の影響（이성주 1998）という見解、三国時代に入る段階として各地の国が統合の過程を経ながら生じた現象（이수홍 2015）という見解がある。

IV. 三韓時代の環壕の役割

前章で検討したように三韓時代後期の環壕は防御的役割が際立って見える反面、前期の環壕は集落の防御のためのものではなく、他の役割があったのではないかという疑念がある。一方、環壕内で小型土器と高坪が出土し、把手附土器など意図的に壊して廃棄したことが疑われる遺物が出土しており、環壕遺構自体の儀礼行為の痕跡とみられるものもある。出土遺物の特徴も重要であるが、本稿では紙面の関係上、遺跡の全体的な様相に注目し、三韓時代前期の環壕の役割についてさらに考えてみようと思う。

1. 儀礼的要素

環壕は住居址や墳墓に比べ大規模な労働力を必要とする遺構である。丘陵斜面の一部または全体を廻って掘削し、その形態を形成するためである。特に三韓時代前期の環壕のように多数の列に造成したり、後期の環壕のように木柵まで設置するなど多くの手間がかけられたものということは常識的なことである。このように造成された環壕は存在自体のみでも環壕の内部と外部の境界が生じるようになることは周知の事実である。また、集落内の一部の空間を閉じて環壕の範囲を造成した青銅器時代の環壕遺跡とは異なり、三韓時代前期の環壕集落は環壕を築造するための丘陵を選択し、造成したもので、多重の環壕で内部空間の閉鎖性を強調した。

三韓時代前期の環壕は後期のものより防御的性格が目立たないが、そうであればこの時期の環壕の内部空間を観察するとその役割を推定することができるのである。環壕の内部空間はその規模に比べ堅穴など遺構数がとても少なく確認（蔚山達川遺跡、陝川盈倉里遺跡、泗川芳芝里遺跡など）される。また、環壕遺跡で確認される堅穴が他の三韓時代の集落の住居址と構造や規模の面で差異が現れず、住居間の序列を想定するのも難しい。少数の住居址が環壕内の空間を営為したことをみると2種類の推測が可能である。一つは環壕内の空間を営為した集団が周辺の居住集団より優位であったり代表性を持つ可能性、もう一つは周辺と分離され、別個の行為のための空間である可能性がある。前者である場合、遺構の状態と出土遺物で優劣関係が立証されなければならないが、これまでのところ根拠となる考古学的資料はなく、後者である可能性がより大きいと考えられる。

環壕の役割について2種類の可能性を提示しようと思う。一つは環壕が造成された当時、内部空間が広場のように何の施設もなかった可能性である。青銅器時代の大規模集落で種々みられる集落の中で平坦面に何の施設も確認されず広場と推定されるものもある。したがって環壕内部の空間も人々が集まる広場の役割をしたのではないか。しかし、広場は出入りが随時可能で、多くの人々が同時に出

入りすることができる構造でなければならないが、環壕は溝という本質的な構造としてみる時、広場のような機能を考えるのは難しい。さらに2列以上の多重環壕で築造された三韓時代前期の環壕の特性からみると環壕の内部空間が閉鎖性がより強調されている。環壕の内部が外部から分離され、出入りも自由というわけではない場所だった可能性が大きくなるようだ。ここで、2番目の可能性が浮上するが、それは儀礼空間だった可能性である。

三韓時代前期の環壕は周辺より若干突出した丘陵を選び、その頂上部平坦面を覆ったり、緩慢な丘陵の斜面をめぐる形態で造成された。周辺より突出した丘陵はまず、眺望圏が確保されているとみることができる。環壕の内部の中心から周辺に視野が開けており、外部からも環壕内部がよくみえる。外部から環壕内部がよくみえるという点は環壕が防衛的役割をしたという点と背馳する概念である。また周辺より若干突出した丘陵は自然と周辺を連結する道の要所に立地するため、現在の概念でも交通上の要地として認識されている。周辺との関係で、中心にあった可能性もあり、集落内で重要な役割のうちの一つを遂行した可能性も提起される。

特に陝川盈倉里遺跡 28号竪穴では主に墳墓で発見される細形銅剣が床面に刺さったまま出土したが、これは竪穴で何らかの儀式的行為があったものと注目されてきた。嶺南地域の三韓時代前期の環壕の全貌が発掘調査された事例は稀であるため、陝川盈倉里遺跡のように環壕内の状況を積極的に反映した遺跡はこれまで報告されたことはない。したがってこの時期の他の地域の類似した形態を参考とし、一部推定してみることにする。星州上彦里遺跡と類似した形態をみせる水原栗田洞遺跡も環壕以外の遺構は確認されていない。特に安城盤諸里遺跡は環壕の中心にある上面が扁平で巨大な自然石が祭壇として推定されており、環壕の儀礼的性格をみせてくれる最も確実な根拠とみられる。巨大な自然石が祭壇まではいかなくても、集落内の巨大な象徴物と認識されたのである。巨石文化の伝統は青銅器時代の支石墓から既に現れているが、巨大な自然石についての当時の人々の崇拜意識があった可能性は十分にある。

儀礼行為は日常生活で衣食住を営むするように、日常的に生じる行為である。しかし、環壕のような一つの象徴物の中でのみ処理された儀礼行為は環壕を築造した集団全体のためのものであると考えられる。環壕のような大規模掘削遺構を築造することができた背景はまた集団全体のための努力ということができる。三韓時代に集団の儀礼行為を想定することができる社会現象は何であったのか。

2. 蘇塗と環壕

文献史ではもちろん、考古学的証拠として三韓時代環壕遺跡を三韓社会の蘇塗と連結してみようとする試み(김유정 2015、나혜림 2017、이형원 2018)は最近、何度か行われた。これは三国志魏志東夷伝に伝えられている馬韓の記事と比較検討してなされたものである。三国志の記事は実際の三韓時代前期と記録当時の時間的間隙があって盲信することはできないが、文化や風俗についての伝承も記録された可能性が高いことも考慮する必要がある(이형원 2018)。

三国志魏志東夷伝で言及された三韓社会の姿の中で別邑に注目しようと思う。別邑は‘蘇塗’という名称で呼ばれていたという。蘇塗は政治的中心である君長の国邑とは異なり、小国の天君が管掌する範囲であるという。天君は‘天に祭祀を行う人’として三韓社会を祭政分離社会とみる根拠となる。蘇塗は神聖な空間で、祭祀を挙げる祭場として解釈することができる。また、祭場の中に逃走した

人は追い返されないという点で外部と遮断された空間であるということがわかる。ここで5月と10月に周期的な農耕儀礼を行った点も農耕社会における蘇塗の社会的位置がわかる部分である。

しかし、このような仮定は、国邑と別邑、国邑隷下の小国単位についての概念を考古学で適用することができるとき成立するものである。集落研究の流れが中心と周辺を想定して、進んでいるので、今後、三韓時代の集落考古学においてさらに発展した研究が登場するだろう。

V. おわりに

嶺南地域三韓時代環壕についての大略的な内容を検討した。三韓時代の環壕は丘陵頂上部を覆ったり、丘陵斜面にかけて廻ったり、丘陵斜面下端部に形成され、丘陵全体を覆う形態を呈している。このような丘陵は周辺の地形に比べ若干突出するなど独立した位置とすることができる。環壕を築造するための立地の選択があったようである。三韓時代前期の環壕では内部空間の大きさに比べ堅穴などの遺構数が少なく、堅穴内で儀礼行為の痕跡が確認されてもいる。このような環壕の特徴からみると、前期の環壕は防御の目的よりは儀礼の場所の一つとしての役割を果たしたようである。三韓時代の儀礼の場所を文献資料では蘇塗と特定しており、これとの関連性を推定してみた。

紙面の関係上、出土遺物と遺構についての詳細な検討ができず、論理的な飛躍と性急な一般化が散見される自評のような恐れ多い文章となった。今後、論旨を発展させ体系的な論考を再度、披露できるようにしたいと思う。

※図と参考文献は韓国語文を参照

(翻訳：長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久)

環濠集落に見る東アジア交流

龍谷大学 徐 光輝

ここでは、今回のシンポジウムの趣旨に沿って、中国大陸における環濠集落の源流について考察し、また環濠集落を通して東アジアの交流様相について考えてみたいと思います。

I. 黄河、長江流域の環濠集落と早期城郭遺跡

1. 黄河流域

黄河流域は中国北方を東西に流れる大河で、甘肅省、青海省の中東部を含む上流域、陝西省、河南省を含む中流域、山東省と河北省の一部を含む下流域に分けられます。ここでは新石器時代前期の集落遺跡は未だに少なく、新石器時代中期の農耕集落として、河南省新鄭市裴里崗遺跡、河北省武安県磁山遺跡がよく知られています。環濠施設は見つからず、竪穴式住居のほか、集落の近くで公共墓地も発見されました。約8千平方メートルの面積を有する磁山遺跡では、竪穴式住居のほか、石皿や擦り棒と数百にのぼる食糧の貯蔵穴が検出されており、中に入っている既に炭化した粟殻を新鮮な粟に換算すれば、少なくとも10万キログラムはあるといわれています。ここでは粟を主要作物とした畑作農耕風景が窺われます。

ところが、次の仰韶文化時代に入りますと、十分防御できる環濠が出現し、更に次の龍山文化時代には環濠とその外側の土塁（城壁の前身）といった二重防御施設を持つ初期段階の城郭が急増するようになります。

西安市半坡遺跡は約5万平方メートルを有し（発掘当時）、南北に長い円形を呈しています。その内、約3万平方メートルを占めている集落の中心部から多くの竪穴式住居址と貯蔵穴のほか、家畜の囿跡などの遺構が発見されました。集落の周りには、幅と深さが5－6メートルにのぼる環濠が人工的に掘削されているが土塁は見当たりません。規模から見る限り、環濠は外敵や猛獣などの侵入に備えた防御施設に違いありませんが、長江流域の同類遺跡に比べて、雨季以外の季節には溝内に水が比較的に少なかったと推定され、空堀の可能性も考えられます。環濠の外には、北が公共墓地で、東に窯跡などの生産施設があります。

一方、西安市臨潼区（旧臨潼県）姜寨遺跡の面積も約5万平方メートルあり、半坡遺跡とほぼ同じ規模の集落です（図1）。



図1 西安市姜寨遺跡の復元図

この集落の使用期間は比較的長く、その第1期の集落中心部は平面円形に近い環濠に囲まれていますが、西側だけは臨河という川があるため、環濠は設けていません。土塁も見当たりません。環濠の外には、東西にそれぞれ公共墓地と窯跡があり、集落の中心部から大量の住居址を確認しました。特に第1期に属する約100棟の竪穴式住居址は2万平方メートル未満の空間の中で、5組に分けられ築かれています。組ごとに1基の大型住居跡を真ん中に置き、住居址の出口はすべて集落中央部の広場を向かっています。また、環濠の内側で守衛所のような性格を持つ遺構も見つかりました。

このような平面円形の大型集落は、近年鄭州市西山遺跡からも発見されました。この遺跡は仰韶文化後期の秦王寨類型に属するもので、年代は今から5300年－4800年前にあたと推定されます。集落の面積は約3万平方メートルあり、注目されるのは環濠とその内側にある城壁がセットになっていることです。環濠は一本のみでなく、何重にもなっており、うち第9号溝は幅5－7.5メートル、深さ4メートルを測り、土塁は深い基礎部を持っており、幅5－6メートル、現存高さ3メートルで、高い水準の版築工法が用いられています。城内には30－40平方メートルの住居址が多く分布しており、100平方メートルに近い大型住居址もあるなど、集落の公共集会だった可能性があります。

特に注目されるのは、近年西安市北部の高陵区楊官寨で総面積約数十万平方メートルに達する巨大な環濠集落遺跡が調査され、環濠を含む集落中心部だけで約25万平方メートルを測るなど、既に仰韶文化時代に拠点集落があったことが分かりました。

龍山時代に入ると、農耕集落の防御体制はさらに厳重になり、城郭と呼ばれる防御集落遺跡が増えます。典型的な実例として、河南省輝県孟莊、淮陽県平糧台、鄆城県郝家台、登封県王城崗、新密市古城寨などの遺跡が挙げられます。これらの城址は平面長方形もしくは方形を呈し、高大な土塁の外側には往々にして深く幅広い堀が巡っており、中国古代都市の伝統に従って、よく城壁と護城河と呼ばれています。ところが、地勢が高くて洪水の恐れのない小さい場合、堀を設けず城壁のみに頼って外敵の侵入に備える城址も少なくないが、このような類例は山東地方にも認められます。

攻城術が益々進むにつれ、従来の環濠集落の時代に比べて、環濠より堅固で且つ高い城壁が重要な役割を果たす時代が次第に訪れてきたと考えられます。これらの城址は、約3万平方メートル（平糧台、郝家台）から16万平方メートル（孟莊）まで、その規模は異なるが、城内では版築による大型建物の基壇、干し煉瓦などの建築部材、守衛所施設、動物祭祀坑、井戸、土器、石器など、様々な遺構や遺物が検出されました。約1万平方メートルを有する王城崗遺跡の中心部では、成人や子供を生贄とした奠基遺構など、貧富の格差や階級分化を物語る実物資料が出土し、近年にはさらにそれを取り囲む巨大な城郭遺跡が見つかったようです。

城郭がさらに巨大化していく事実は夏王朝の東、西両中心地からも確認されました。約375万平方メートルを有する河南省洛陽市偃師県二里头遺跡や西部の中心地とされる山西省西南部の夏県東下馮遺跡などは夏、殷王朝の都城を考える上で非常に重要な遺跡です。山西省西南部にある陶寺遺跡では既に山西地方の龍山文化（陶寺文化）時代の約280万平方メートルに及ぶ巨大な城址が見つっています。ここでは、前期の小城址、中期の大城址のほか、後者の中に設けられた天文観測台や実測道具とされる圭尺、龍文盤など祭祀に使われた多種類の土器、漆器、木器、揚子鱔の皮を被せた太鼓、琮など礼儀制度を表す玉器、鈴、歯車のような青銅器、夥しい豚頭などを副葬した大規模な貴族墓が検出されており、後期には恐らく手工業者（？）を主体とする内部抗争によりこれらの貴族墓が酷く

破壊され、遺骨が散乱し、大きな殺戮行為があったことも発掘調査で分かりました。一方、最近、陝西省北部の黄河流域に立地する神木市石峁（せきごう）では総面積約 400 万平方メートルの超大型石城遺跡が見つかり、土器などの比較からこの文化集団の人々が南下し、陶寺文化集団に致命的な打撃を与えたとの見方もあります。これは後の夏王朝の成立問題にも深くかかわり、慎重に考える必要があります。石峁遺跡はちょうど後世の万里の長城の近くにあり、オルドスや西北地方の文化が入る要衝地帯に位置するなど、各地方の早期国家の形成過程や相互関係を考える上では極めて重要な遺跡です（図2）。



図2 石峁遺跡外城東門跡

数十年以来、河南省の鄭州商城、偃師商城、同師趙城址、山西省の垣曲商城のほか、河南省の安陽市西北郊外にある殷墟遺跡群（世界遺産）の北部からも殷商時代の城址（洹北商城）が見つかり、その多くは従来の城址の規模をはるかに上回り、長方形や方形の平面プラン及び城壁と護城河がセットとなっているのが基本的な特徴です。

これは普通の農耕集落から始まり、仰韶時代の環濠集落と龍山時代の城址を経て、後の青銅器時代、即ち歴史時代の城郭都市へと移り変わる、中国古代都市の必然的な発展結果だといえるでしょう。即ち、中国式都市（土城）はこのような過程の中で完成されました。

一方、黄河下流域の山東地方は海岱文化区、即ち東夷文化の分布区としてその文化伝統は非常に古く、旧石器時代までさかのぼるといわれていますが、少なくとも新石器時代以降の諸考古学文化の源流は基本的に確認されました。

これまで山東地方で確認された先史時代の城址は、殆ど龍山時代に属し、土壘を持たない環濠集落遺跡はまだ少ないです。龍山時代の景陽崗城址は細長い平面形態を呈し、主に地理条件に沿ったものですが類例は殆どありません。このような城址の中では大型の建物跡、住居址、井戸、窯などの生活、生産関係の遺構が残っており、ところによって人祭、牲祭の土坑もあります。一部の城址と大型墓からは精美な玉器とセットとなる黒陶礼器が出土しました。原始文字の出現や貧富の格差、貴族階層の存在も窺われます。龍山時代に東夷社会では既に初期国家の胎動が始まったことでしょう。

2. 長江流域

長江中流域に属する洞庭湖西北の澧水流域の新石器時代文化は約9千年前の彭頭山文化から始まり、4千6百～3千8百年前には石家河文化と変わり、山東地方の龍山文化と山西地方の陶寺文化に並行する歴史時代の前夜に入ります。ここでは遅くとも彭頭山文化のある段階から既に環壕集落が登場し、水田稲作に関わる炭化米の実物資料も発見され、水田稲作を営む農耕集落の存在が確認されました。これまで長江中流域で見つかった環壕集落遺跡と城郭遺跡は10か所を超え、主に湖南省澧県で八十垱遺跡、城頭山遺跡（図3）、湖北省で天門市石家河遺跡など、十数か所が知られています。



図3 城頭山遺跡

このほか、青銅器時代の土城遺跡－湖北省黄陂県盤龍城遺跡があり、殷周時代青銅器文化と密接な関係があります。

これらの集落遺跡は殆ど屈家嶺文化から石家河文化の中期にかけて使用されたものであり、八十垱遺跡は彭頭山文化に属する最も古い環壕集落遺跡です。しかし、冒頭で申しましたように、この遺跡は内蒙古自治区赤峰市にある興隆窪遺跡同様、環壕の規模が小さく、防御用より、むしろ内外を区別するための存在だと考えていいでしょう。

立地条件からみると、遺跡は一般的に比高約数メートル以内の台地に位置し、その周りは比較的到低く、河川と湖泊が縦横に流れます。環壕は往々にして人工的に掘削されたもので、場合によっては近くの自然流路を環壕の部分的に利用しました。長い歳月の自然作用や人為的な変動によって現存する環壕の幅は10～100メートル、深さは2～4メートルあり、壕内には常に水が溜まっています。石家河遺跡群の中心部から南北長方形に近い、全長約4800メートルの土塁を発見し、土塁の外側には最大幅約100メートルの環壕も確認しました。環壕の断面は一般的にU字形を呈し、V字形は殆どありません。城頭山、陰湘城、石家河、馬家 遺跡の近くでは河川や古河道が見つかり、一部は環壕と繋がっているため、環壕は主に集落内部の用水、排水、水運、灌漑のほか、洪水や外敵への防御にも活用されたでしょう。

平面形態は大きく二つの型式に分けられます。Ⅰ型式は円形もしくは楕円形に近いもので、八十埧、城頭山、走馬嶺遺跡があり、Ⅱ型式は丸隅方形もしくは長方形に近いもので、石家河、馬家垸遺跡が挙げられます。前者の規模と年代がⅡ型式より全体的に小さくて古いです。八十埧遺跡のような約3万平方メートルのものに対して、石家河遺跡は城内の面積だけで120万平方メートルに達する、超大型の城郭遺跡です。平面の形がこのように移り変わる原因はどこにあるのかが興味深く、同様な現象は黄河と遼河流域からも認められます。

これらの集落遺跡から規模の異なる住居址、水田跡、窯跡、祭祀跡、墓地と共に、大量の土器、石器のほか、玉器や木器も出土しました。彭頭山、八十埧、城頭山の諸遺跡からは大量の炭化米や植物の種が出土し、城頭山遺跡では水田跡も確認され、水田稲作を中心とする農耕集落の風景が窺われます。

石家河遺跡群は約30か所の遺跡からなる複合的遺跡として、これらの遺跡は殆ど屈家嶺文化から石家河文化の中期にかけて形成されたもので、地域文化の最盛期の存在が窺われます。実際、屈家嶺文化の分布範囲は長江中流域を遙かに越えて黄河中流域の河南省南部を含む周辺地域に大きな影響を及ぼしたが、後の龍山時代になると逆に中原龍山文化の強い影響を受けるようになり、石家河文化の後期からは地域伝統文化が急速に衰退していくが、その原因については未だよく分かっておりません。

石家河文化期以後の大型集落の状況についてはよく分からないが、殷商中期即ち二里岡上層文化期に相当する盤龍城遺跡（7.5万平方メートル）と石家河遺跡群の東北部に位置する西周時代の土城遺跡が知られています。

一方、長江下流域においても新しい考古発見が相次いで報道されています。

新石器時代の最も古い遺跡として、江西省の東北部にある万年県仙人洞、吊桶環などの洞窟や岩陰遺跡が挙げられます。前者から1万年前後にさかのぼると言われる土器、石器と稲の資料のほか、吊桶環遺跡では大量の獣骨が見つかり、両者の関係も注目されています。

最近、浙江省の上山集落遺跡で約1万年前まで遡る稲作関連資料が出ており、田螺山遺跡からも7-8千年前の集落遺跡が見つかりました。

1970年代に発掘した浙江省の河姆渡遺跡は大量の稲粃、稲藁と一部の炭化米、骨耜、平面長方形の高床式住居址、セットになる釜と竈や三足器に代表される独自の土器群、木枠の井戸址、空前発達した木工技術、双鳥朝陽文の彫刻品などで広く知られています。この遺跡に見られる高度に発達した水田稲作文化は、当時東アジアにおける稲作起源問題の研究に大きな影響を及ぼしました。また、この遺跡では、稲穂や家畜とされる豚の姿が刻まれている土器と中国で最も古い漆器（木碗類）が出土し、手工業や家畜業の有無も注目されています。ところが、近年調査した浙江省蕭山県跨湖橋集落遺跡では、同時期の遺構や遺物が出土し、両者の関係がある程度分かりましたが、後者の土器には長江中流域の大溪文化からの強い影響が見られ、集団規模の移動があったと考える研究者もいます。

河姆渡文化以後、馬家浜文化と崧沢文化を経て良渚文化に至る3千年以上の間、長江下流域では一貫して水田稲作文化が栄えました。羅家角、草鞋山、龍虬荘などの農耕集落遺跡から炭化米などの実物資料が見つかり、石鋤や石包丁を含む道具類も大量に出土しました。また、草鞋山遺跡では、水田跡や灌漑施設も検出されました。

近年、江蘇省宜興市駱駝墩遺跡の発掘調査によって、初めて太湖以西における馬家浜文化の農耕集落の様子が分かるようになりました。

良渚文化において最も重要なのは良渚遺跡群です。とりわけ莫角山遺跡と遺跡群の北部を東西に走る大規模な土塁が注目を浴びています。最近、莫角山をはじめとする宮殿区を内包する超大型城郭遺跡が確認されました（図4）。

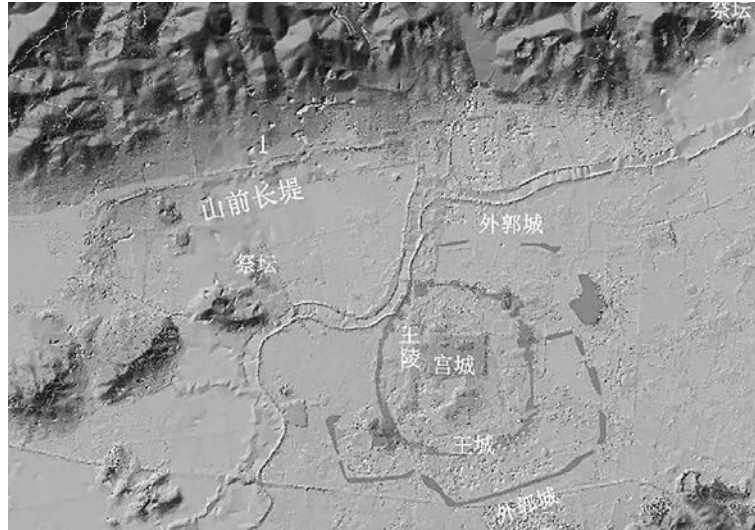


図4 浙江省良渚遺跡群平面図

古城の平面は丸隅長方形を呈し、城壁の長さは、東西 1500 - 1700 メートル、南北 1800 - 1900 メートル、総面積は 290 万平方メートルにのぼり、城壁の主体部は現存する部分で最高 4 メートルあり、主に粘土で堆築し、基底部の幅は 40 - 46 メートルで主に石材が敷かれ保存状態もよく、水門 6 か所を確認し、一部河川（人口運河）の岸では船着場（？）や板材を使った護岸施設も検出しました。これは良渚古城の外城とみられ、今から約 4 千年前に宮城、内城を含む三重構造を持つ城郭都市があったと考えられます。

長江上流域の成都平野において、青銅器時代の考古学文化として三星堆遺跡が広く知られており、近年には龍山文化時代に相当する宝墩古城遺跡が確認されました。

総じて申しますと、黄河、長江両流域では、約 1 万年前から農耕文化が始まり、やがて集団定住生活を支える集落が形成されるが、そのうち、中心的な集落は規模が比較的大きく、また部分的に自然流路を利用しながら、人工的に堀を掘削して集落を守るという伝統があり、約 6 千年前後には環壕の規模が著しく拡大し、本格的な防御施設となります。約 4 千 5 百年前後になりますと環壕の内側に高い城壁が現れ、二重防御体制へと進みます。

このような都市建設理念は夏、殷、周時代を経て、秦漢時代から明清時代まで一貫して更に発展し、宮城（内裏）、皇城、外城（羅城）とその外側の護城河（堀）による中国特有の都市が長く存続しました。この事実から中国本土において、約 5 千年間にわたって環壕集落の時代が続き、それから次第に「環壕+城壁」といった城郭都市時代に入ったと考えられます。特に今から 4 千 5 百年前後という時期はちょうど全土規模で龍山文化時代は始まり、青銅器が本格的に作られ、玉器や精美な土器などが礼器（儀器）化するなど、貧富の格差、貴族階層ないし君王が出現した初期段階の城郭都市、つま

り文献記録に見られる「邑城」が各地に建立していたと考えられます。司馬遷の『史記』に夏の時代に万国があると記していますが、まさにその通りです。

Ⅱ．東北地方の環壕集落、中原式土城、倭との文化交流

先史時代文化が比較的進んだ東北地方西南部の西遼河流域では、起源年代が黄河、長江流域と同時代の環壕集落はありますが、その終焉期はかなり遅く、戦国時代後期、つまり紀元前3世紀の初頭まで存続し、さらに北方の東北アジア内陸部と東方の朝鮮半島、日本列島に行くほど、その使用下限年代が長く伸びます。

これまでの発掘調査成果によれば、東北アジアにおける先史時代から歴史時代に至るまでの集落形態は、主に環壕集落、石城・山城、城郭都市の三型式に分けられるが、土城－城郭都市は、主に戦国時代後期に、現在の北京周辺に都をおいた諸侯国の一つ－燕国による北進、東進政策に伴って作られたものです。

この地方における環壕集落は、約8千年前から出現し、西遼河流域の内蒙古赤峰市の興隆窪遺跡(図5)、同白音長汗遺跡、遼寧省阜新市査海遺跡などが最古の発見例になります。査海遺跡などでは、大型の貯蔵穴が大量に見つかり、一部は雑穀の貯蔵用に使われたものと見られます。



図5 内蒙古自治区敖漢旗興隆窪環壕集落遺跡

興隆窪遺跡では当初一度に配置した100棟以上の住居跡が確認されるなど、社会組織の構造が注目されます。全体的に見れば、年代が古いほど集落の平面形態において不定形のものが多く、環壕の規模も外敵や猛獣の侵入を防ぐことが出来ないほど小さいです。

興隆窪文化の次に趙宝溝文化、紅山文化、小河沿文化が続き、やがて青銅器時代の夏家店下層文化、魏營子文化、夏家店上層文化と呼ばれる考古学文化が続きますが、平野部では環壕集落が中心となり、山間部、丘陵地帯では大規模な石城、山城が大量につくられ、原住民の社会ネットワークを形成していました。

最近、瀋陽市街地北部の千松園で新楽上層文化の環濠集落遺跡が見つかり、その周辺でも同時代の環濠集落遺跡が数か所確認されました。今から約3千年前の集落です（図6）。



図6 瀋陽市千松園遺跡の環濠跡



図7 北崴遺跡の遼寧式銅劍

また、新民県北崴の新楽上層文化遺跡から最古式の遼寧式銅劍や滑石製斧の鋳型などが検出されました（図7）。

『史記』などによれば、当時、燕国には昭王という諸侯王（実質的には国王）が君臨し、北方の東胡という民族と東北方面の朝鮮という民族勢力に悩まされていましたが、紀元前290年代に、かつて燕国から東胡に入って人質にされた秦開という将軍を重用して、東胡を北へ千里撤退させてから朝鮮を東へ二千里も撤退させると共に、上谷郡・漁陽郡・右北平郡・遼西郡・遼東郡といった五郡を設け、燕国などを含む華北、中原地方では既に一般的な行政制度となっている郡県制を実施しました。

近年、遼寧省葫蘆島市邵西屯で、この時期の土城遺跡が見つかり、また同建昌県東大杖子遺跡では、当時燕国の冊封を受けた土着貴族勢力の墓群が発見されました。副葬品には、金片で柄を飾った遼寧式銅劍などの土着系遺物のほか、燕の青銅製礼器も多く出土するなど、燕国と古朝鮮の関係を知る上で非常に重要な発見です。

また、玄菟郡前期の郡治は北朝鮮の北部にありますが、中後期には遼寧省撫順市境内に移り、近年その後期の郡治土城を発見しました。平面長方形の典型的な漢式土城として、漢の独特の灰色陶器が大量に出土したほか、後に高句麗によって占領されたため、石オンドルや蓮華文瓦を含む遺構、遺物も多く検出されました。

注目されるのは、近年弥生時代の環濠集落遺跡である長崎県壱岐市の原の辻から遼東地方でよく見られる灰色土器が出ました。壺の形を呈し、中型の器に属します（図8）。また、最近カラカミ遺跡では、「周」という隸書体の文字が刻まれている土器が検出され、両地の文化交流を理解するとても貴重な資料です。



図8 左：原の辻遺跡出土



右：大連地域漢墓出土

原の辻遺跡は、『魏志倭人伝』に出てくる「一支国」の中心集落と対大陸最先端拠点として、朝鮮半島にある楽浪郡との交流は勿論、さらに楽浪郡を経て、遼東郡と交流したと考えられます。当時、倭国の使節は中国の郡県都市を実見し、その形や機能、都市生活などについて相当了解していたでしょう。『魏志倭人伝』に「国々有市」とありますが、この記事をどう解釈するかが問題です。個人的には、まだ貨幣による商品経済がなかったとしても、国が指定した場所で貿易を行なうのは、既に都市経済の要素が実在したことを示唆するものと思います。物々交換の場合にしても、それを生産する様々な手工業者と消費者が定期的集まるのは、普通の集落とは規模が異なり、国による管理制度が必要です。

今後、漢魏時代における倭国との文化交流をさらに解明していくためには、一支国、伊都国、奴国、邪馬台国などに対するさらなる考古学調査研究も欠かせませんが、女王卑弥呼が率いる邪馬台国に属する諸国の所在位置や里程問題を明らかにする必要もあります。

おわりに

以上の内容をまとめると次の通りです。

1. 黄河と長江流域では、今から約1万年頃前から農耕文化が始まり、やがて集団定住生活が営まれ、自然条件や交通の便が良いところでは、先に環壕集落という、一般の村より大きい中心的な村が現れます。このような環壕集落は数千年の歳月にわたって存続したが、約5千年頃前になると、環壕の内側に城壁の前身である高い土塁が築かれ、4千5百年前後から本格的な城壁+護城河（堀）による二重防御体制が見られますが、これは歴史時期前夜に当たる龍山文化時代の到来を告げます。このような城郭は後の歴代王朝に引き継がれ、数千年にわたる中国式都市の伝統を造り上げました。
2. 遼寧地方では、8千年頃前から環壕集落が登場し、雑穀農耕技術も次第に成熟していきます。ところが、環壕集落の存続期間が非常に長く、紀元前3世紀初頭に燕国勢力の進出によって、土着文化が変わり、中国式都市の建設が始まりました。言い換えれば、長江や黄河流域に比べて、かなり遅い時期まで環壕集落が使用されました。

注目されるのは、遼寧地方の環壕集落遺跡における主な特徴が朝鮮半島や日本列島の環壕集落にも見られることです。例えば、防御用外圍施設は環壕、集落全体の平面は不定形、青銅器時代後期

になると無文土器が主流となり、東北系青銅器、即ち遼寧式青銅器文化が広まるなど、地域間文化交流の様相が窺われます。近年、韓国の扶余松菊里、蔚山検丹里、同無去洞、晋州南江などで多くの環濠集落遺跡が発見され、弥生文化との交流関係が注目されています。

参考文献

1. 石家河考古隊（湖北省荊州博物館、湖北省文物考古研究所、北京大学考古学系）『肖家屋脊－天門石家河考古発掘報告之一』（上、下）、文物出版社、1999
2. 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队「内蒙古敖漢旗興隆窪遺址発掘簡報」『考古』1985-10
3. 拙稿「中国の農耕集落」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学Ⅴ 集落と都市』、同成社、2003
4. 劉斌「尋找消失的文明－良渚古城考古」、中国考古網 2016年10月26日より。
5. 中国社会科学院考古研究所『中国考古学 秦漢卷』、中国社会科学出版社、2010
6. 趙曉剛ほか「瀋陽市千松園遺址 2010年発掘簡報」、『考古』2013年第9期、など。
7. 長崎県教育委員会 2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集

環濠集落としてのカラカミ遺跡

壱岐市教育委員会 松見 裕二

■カラカミ遺跡確認された大溝

カラカミ遺跡の調査において、丘陵を縦断する大溝が確認されている。

丘陵頂部にあるカラカミ神社の西側部分についてはカラカミ遺跡1次〔カラカミⅠ区及びⅡ区〕の調査及びカラカミ遺跡2次〔カラカミⅢ区〕の調査成果で大溝の想定範囲は固まりつつあるが、西側以外の北側、東側、南側については、明確な大溝の痕跡を確認できていない。



調査の結果、大溝の掘削時期は特定できていないが、埋没時期は弥生時代後期中葉頃と判断できる。大溝から出土する遺物を見ると、丹塗りを施した祭祀系の遺物が多くみられ、祭祀行為後、祭器を廃棄した様相を呈す。また、祭祀に使用されたと想定される貝や動物の骨なども大量に発見されており、当時、カラカミ集落で行われていた祭祀の様子をうかがい知ることができる。他にも大溝内からは、搬入土器〔楽浪系瓦質土器（鉢）〕や小形仿製鏡なども、弥生土器と一緒に出土しており、カラカミ集落の交易・交流のネットワークを考える上で貴重な発見となっている。

掘り巡らされた大溝の内部に居住域が見つかった可能性を想定すると、集落の防衛的な役割を果たす大溝だったと考えることができる。カラカミⅡ区〔カラカミ780-1区〕で検出された大溝は、意図的に「V」字状に掘られており、防衛面ではその効果は大きい。



▲カラカミⅡ区で検出された大溝の断面

また、地上式周堤付炉跡をはじめとした鍛冶関連遺構の存在も確認されていることから、鍛冶生産に必要な土壌環境を丘陵上につくり、居住域に溜まる水を強制的に排出するために大溝が掘り巡らされたとも考えることができる。



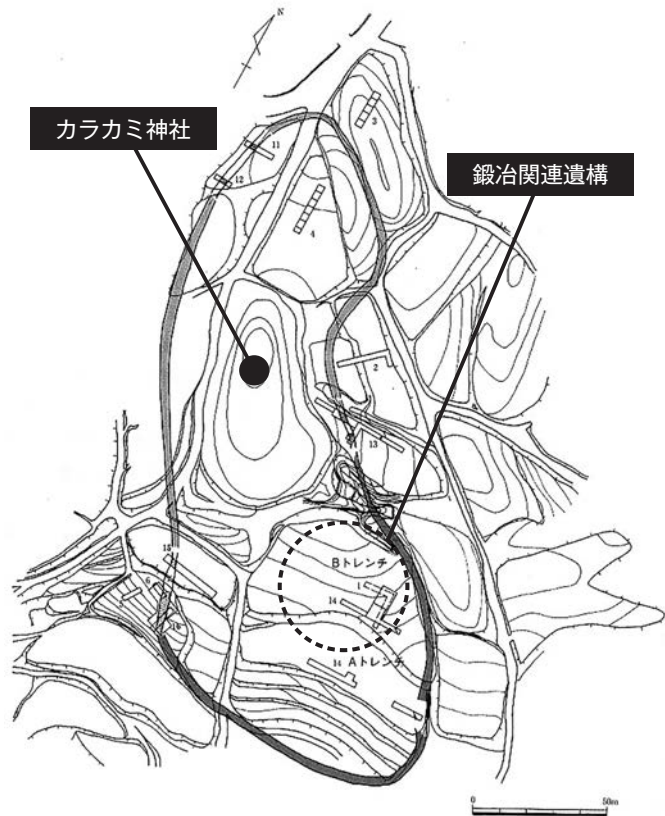
■環濠の可能性について

大溝の可能性についてはこれからの調査に期待するところも大きいですが、集落を取り囲む大溝となると壱岐島内では原の辻遺跡に次ぐ第2の環濠集落の姿がみえてくることとなり、一支国における弥生集落遺跡の実態解明を躍進させる可能性を秘めている。

カラカミ遺跡における環濠の存在については、九州大学教授宮本一夫氏が実施した調査報告書〔壱岐カラカミ遺跡Ⅳ－カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査1977・2011 宮本一夫編 2013〕において環濠の復元が考察されている。

カラカミ丘陵の最頂部にあるカラカミ神社を取り囲むように掘られた環濠が、環濠内には地上式周堤付炉跡を持つ鍛冶関連遺構が存在していたと推考している。

想定された環濠の大きさは南北方向250メートル、東西方向100メートルの規模となり、原の辻遺跡の内環濠想定範囲南北方向600メートル、東西方向300メートルの半分にも満たない大きさとなる。



▲環濠の復元図 宮本一夫教授作成



カラカミ遺跡の環濠は集落全体を取り囲む環濠的機能ではなく、山頂部分〔特定の空間〕を取り囲む環濠的機能を持っているものと思われる。環濠内を特別な空間もしくは特定のエリアとして捉えることで明確に区画する意図があったものと推考できる。同様の機能を持つ環濠は横隈北田遺跡〔福岡県小郡市〕、国史跡田和山遺跡〔島根県松江市〕、大盛山遺跡〔兵庫県朝来市〕などが類例として挙げられる。



▲国史跡田和山遺跡〔島根県松江市〕



▲大盛山遺跡〔兵庫県朝来市〕

講師プロフィール



じょ
徐
こう
光
き
輝

龍谷大学国際学部教授

1961年中国生まれ。吉林大学大学院考古学研究科博士課程修了。歴史学修士。専門は中国北方考古学と東アジア古代文化交流史。著作に「中国の農耕集落」、「遼寧式銅剣の起源について」、「日本考古学に何を求めるか」、「東北アジア古代文化論叢」などの論文や編著がある。



キム
金
ユ
宥
ジョン
正

釜山博物館学芸研究士

1985年、釜山市生まれ。釜山大学校大学院考古学専攻博士課程。専門は青銅器～三韓時代の環壕。著作に『青銅器～三韓時代環壕の変化と性格』（釜山大学校大学院碩士学位論文 2012年）、「東萊温泉洞遺跡環壕の意義」『釜山博物館研究論集』21（2015年）などがある。



まつ
松
み
見
ゆう
裕
じ
二

壱岐市教育委員会文化財課係長

1976年鳥栖市生まれ。別府大学文学部史学科卒業。専門は弥生時代、特に集落形成及び構成変遷。著作に『海の王都・原の辻遺跡と壱岐の至宝』（壱岐市教育委員会、2015年）、「原の辻遺跡の全貌展」（壱岐市立一支国博物館、2013年）などがある。



ふる
古
さわ
澤
よし
義
ひさ
久

長崎県埋蔵文化財センター主任文化財保護主事

1981年京都市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(文学)。専門は東北アジアの先史文化・中国貨幣。著作に『東北アジア先史文化の変遷と交流』（六一書房、2018年）、「原の辻遺跡総集編Ⅱ」（共編著、長崎県教育委員会、2016年）などがある。

平成 30 年度 東アジア国際シンポジウム

環濠集落 その源流をたどって

—環濠集落にみる東アジア交流—

長崎会場

2018 (平成 30) 年 10 月 20 日 (土)

長崎歴史文化博物館 [1 階ホール]

壱岐会場

2018 (平成 30) 年 10 月 28 日 (日)

壱岐市立一支国博物館 [3 階多目的ホール]

主催 長崎県埋蔵文化財センター

共催 釜山博物館、長崎歴史文化博物館、壱岐市立一支国博物館

後援 長崎市教育委員会、壱岐市教育委員会、魏志倭人伝のクニグニネットワーク
参加教育委員会 (福岡県教育委員会、佐賀県教育委員会、福岡市教育委員会、
飯塚市教育委員会、春日市教育委員会、朝倉市教育委員会、糸島市教育委員会、
宇美町教育委員会、唐津市教育委員会、神埼市教育委員会、吉野ヶ里町教育
委員会、対馬市教育委員会)、長崎新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、毎日
新聞社、読売新聞西部本社、壱岐新聞社、(株)壱岐新報社、NHK長崎放送局、
NBC長崎放送、KTNテレビ長崎、NCC長崎文化放送、NIB長崎国際
テレビ、壱岐ビジョン株式会社

「カラカミ遺跡 環濠土層断面の剥ぎ取り」

土層の剥ぎ取りは発掘調査で得た貴重な情報を保存するための方法の1つです。

発掘調査で露出した土層は、調査後は埋め戻すなどして、再び目に触れる機会はありません。写真や図面では記録できない土の粒子の大きさや質感、堆積の様子など詳しい情報をそのまま保存するために、土層の剥ぎ取りは必要に応じて行なわれます。

～土層断面剥ぎ取り作業のながれ～



1 土層の表面に「親水性ウレタン樹脂」を塗ります。樹脂が浸み込んだところが固まります。



2 ガーゼを貼り、再び「親水性ウレタン樹脂」を塗ります。季節や気候にもよりますが、樹脂が固まるまで半日～1日かかります。



3 樹脂が固まったら、いよいよ剥ぎ取ります。土層を転写しているのので、実際に露出していた土層断面とは左右が逆になっています。



4 余分な土を水で洗い流します。樹脂が浸透しているところは、デッキブラシで強くこすってもとれません。



5 強力な接着剤（エポキシ樹脂）で板に貼り付けます。

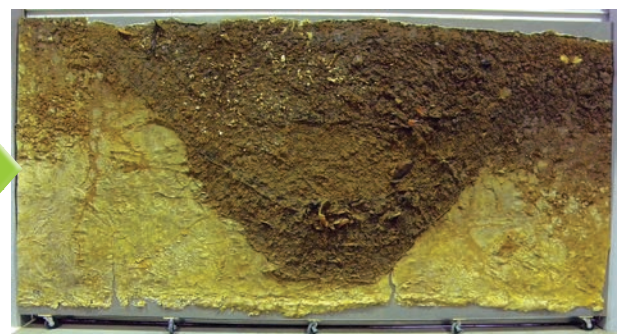


6 仕上げに土層断面の表面に薄めた接着剤を噴霧してコーティングします。細かい土の剥落防止と、樹脂によって表面が濡れ色になることで、より臨場感が増します。



カラカミ遺跡環濠土層断面

完成



土層断面剥ぎ取り資料